

## 自己の夢をつくりあげる 生き方探究教育のさらなる充実を求めて

- 人や社会とのつながりを意識した，体験的な学習の実際 -

子どもたちを見ていると、「今学習していることが社会に出て，どう役立つのか。」「何のために勉強するのか。」ということが実感できていない状況がうかがえる。このような現状を受け，文部科学省は，平成20年7月に策定した「教育振興基本計画」の中で，「子どもたちの勤労観や社会性を養い，将来の職業や生き方についての自覚に資するよう，（中略）小学校段階からのキャリア教育を推進する」との教育改革の方向性を示した。

京都市でも，「地域・社会とのかかわりの中で生き方を考え，生きる力をはぐくむ」生き方探究教育の取組を進めている。本教育を通じて，子どもたちが将来，社会人・職業人として自立していくことができるよう，それぞれの発達段階に応じた取組を，さらに充実させていく必要がある。

そこで，本研究では，各教科等の中の「働くこと」「生きること」にかかわる学習活動に重点をおき，人や社会とのつながりを意識した体験的な学習を組み込んだ，自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）をはぐくむ指導の在り方について提示した。

# 目 次

はじめに	1	第3章 小学校生き方探究教育の実践	
第1章 自己の夢をつくりあげる 生き方探究教育		第1節 第2学年「生活科」	
第1節 小学校における生き方探究教育とは		(1) 人とのつながりを意識した 取組の工夫	16
(1) 生き方探究教育が求められるわけ	1	(2) 子どもの姿から	17
(2) 自己の夢をつくりあげる八つの要素	4	第2節 第3学年「社会科」	
第2節 生き方探究教育を実践するためには		(1) 社会とのつながりを意識した 取組の工夫	20
(1) 発達段階に応じた 「めざす子どもの姿」	6	(2) 子どもの姿から	21
(2) 各教科等の中で進める 生き方探究教育	7	第3節 第5学年「総合的な学習の時間」	
第2章 体験的な学習を生かした 生き方探究教育		(1) いのちのつながりを意識した 取組の工夫	24
第1節 「共生と自立」の視点に立った 体験的な学習とは		(2) 子どもの姿から	25
(1) 「体験的な学習」のとらえ方	9	第4章 生き方探究教育の さらなる充実を求めて	
(2) 「体験的な学習」の組み立て方	11	第1節 研究の成果と課題	
第2節 体験的な学習を 有意義なものにするためには		(1) 体験的な学習を取り入れた学習計画	29
(1) 学習計画の中での工夫	13	(2) つながりを意識した 個に対する働きかけ	30
(2) 個に対する働きかけの工夫	15	第2節 今後の取組に向けて	
		(1) 生き方探究教育推進の六つの手順	31
		(2) キャリアノート作成のすすめ	32
		おわりに	34
		付表	35

< 研究担当 > 河野 由佳 (京都市総合教育センター研究課研究員)

< 研究協力校 > 京都市立仁和小学校  
京都市立六条院小学校

< 研究協力員 > 川合 正子 (京都市立仁和小学校教諭)  
吉田 浩一郎 (京都市立仁和小学校教諭)  
小島 明子 (京都市立六条院小学校教諭)

## はじめに

百年に一度の経済危機といわれる厳しい経済環境の下、子どもたちは自分の将来にどのような未来像を見出しているのだろうか。

1970年代の高度成長が始まったころから、無気力・無関心・無責任な若者の気質を表現する、「三無主義」という言葉がメディアなどで使われるようになった。また、「家庭教育手帳」には、「今の子どもは冷めていて、将来の夢や希望ももたず、難しい目標はチャレンジする前にあきらめてしまふと言われていました。」<sup>(1)</sup>と、子どもの将来展望を懸念する内容が書かれている。

しかし、このような子どもばかりではない。昨年かかわった研究協力校の子どもに「どんな大人になりたいですか。」と問いかけると、「私はね、パティシエになって、おいしいケーキをつくりたい。」「ぼくは、プロ野球チームに入って、人気のある有名選手になりたい。」と目を輝かせ、夢中になって将来の夢を話してくれた。「こんな仕事をしたい。」「こんな人になりたい。」といった夢や希望をもっている子どもは、今の時代にもたくさんいるのだと感じた瞬間であった。

幕末の動乱期に活躍した坂本龍馬は、自分の名誉や、地位やお金のためではなく、日本の未来を明るくするために何ができるのかという目標や問いを持ち続け、人々の生活のために、強い信念をもって生き抜いた。社会科の歴史学習や道徳の時間に彼のことを取り上げ、このような彼の生き方にふれさせると、子どもたちは、「龍馬ってかっこいいなあ。」「私も、自分の間違いを素直に認め、改めることができる人になりたい。」「ぼくも、自分のことだけでなく、大勢の人のために何ができるかを考えたい。」といった感想をもち、将来の自分の姿を思い描いていた。龍馬との出会いを通して、今の自分はどのような姿なのかを人や社会とのかかわりの中で自覚し、どのような大人になりたいのか、これから先、どう生きていけばよいのかといった夢やあこがれについて語っている姿が印象的であった。

このような子どもたちを育てるのが生き方探究教育であると考えている。今日が困難や危機のときであるとするならば、このような時代だからこそ、自分に自信をもち、信頼できるものが自分にはあるのだと言い切れる子どもになって欲しい。そして、ピンチをチャンスに代えて、前向きにたくましく生きて欲しいと願っている。

そのためには、生き方探究教育を通して、学校で学んだことを、生活や社会にどう生かしていくのかを、子どもたち自身が気づくことができるようにしていく必要がある。また、私たち大人は、子どもの夢や希望、あこがれに耳を傾け、常に励まし、見守っていくことが大切であろう。

では、生き方探究教育の理念をいかに教育実践につなげていけばよいのだろうか。本研究では、各教科等の中の「働くこと」「生きること」にかかわる学習活動に重点をおき、自己の夢をつくりあげる力をはぐくむ、体験的な学習を取り入れた指導の在り方を提示した。

## 第1章 自己の夢をつくりあげる

### 生き方探究教育

#### 第1節 小学校における生き方探究教育とは

##### (1) 生き方探究教育が求められるわけ

中央教育審議会の報告によると、最近の若者について、「身体的には早熟であるものの、精神的・社会的自立が遅れ、将来の生き方・働き方について考え、選択・決定することを先送りにする傾向など、発達上の課題が一層顕著になっている」<sup>(2)</sup>ことが指摘されている。自分の将来についてあまり考えないまま「とりあえず就学する。」「なんとなく学校に通っている。」といった若者が増えていることを危惧する声が高まっているのである。また、若年層の無業者が60万人、フリーターが170万人を超えている現状、高い離職率などといった就職に関する社会的問題は改善されていない。この現状を受け、仕事や働くことの意味、大切さを考えるキャリア教育が、従来の大学や高等学校から、小中学校にも広まってきている。

文部科学省は、キャリアを「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖」とした上で、キャリア教育の定義を以下のように示している。<sup>(3)</sup>

「児童生徒一人一人のキャリア発達<sup>1</sup>を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」  
端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

1 発達とは生涯にわたる変化の過程であり、人が環境に適應する能力を獲得していくことである。その中で、キャリア発達とは、自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程である。

(文部科学省『キャリア教育推進の手引』2006.1 p.3より抜粋)

では、今回の学習指導要領の改訂に伴い、キャリア教育はどのように位置づけられているのだろうか。

2008年3月に出了た文部科学事務次官通知によると、「キャリア教育などを通じ、学習意欲を向上するとともに、学習習慣の確立を図るものとした」(4)と、キャリア教育の必要性が示された。

また、平成20年3月に告示された小中学校の新学習指導要領(以下、「新学習指導要領」とする。)に「キャリア教育」という文言は出てこないが、児童生徒の進路や将来の生き方に関する事項が重視されていることが読み取れる。例えば、小学校学習指導要領総則には、「児童が自己の生き方についての考えを深め、(中略)児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」(5)と明記され、この理念は、国語や道徳、総合的な学習の時間などにも反映されている。現行学習指導要領の改訂に伴い、道徳の補助教材『心のノート』には、「働くことの良さ」をテーマにしたページが低学年に加わった。

さらに、同年7月に策定された教育振興基本計画では、今後5年間の施策として「小学校段階からのキャリア教育」の推進が盛り込まれている。

これらのことから、小学校低学年の段階から発達に応じたキャリア教育を系統的・計画的に進め、子どもが将来、社会人・職業人として自立して生きていくために必要な意欲・態度や能力を育てていくことが重視されていることがわかる。

ここで、「勤労観・職業観」をどのようにとらえるかを整理しておくことにする。

平成14年に出了た「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)」(以下、「調査報告書」とする。)によると、「職業観・勤労観」は次のように定義されている。(6)

「職業観・勤労観」は、職業や勤労についての知識・理解及びそれらが人生で果たす意義や役割についての個々人の認識であり、職業・勤労に対する見方・考え方、態度等を内容とする価値観である。その意味で、職業・勤労を媒体とした人生観ともいふべきものであって、人が職業や勤労を通してどのような生き方を選択するかの基準となり、また、その後の生活によりよく適応するための基盤となるものである。

このことから、職業や働くことを通して、子ども一人一人が働くことの意義や目的を探究し、どのように生きていくのかという価値観を形成・確立していく過程において、キャリア教育は重要な

役割を担っていることがわかる。

また、三村は、「勤労観」「職業観」のそれぞれについて次のように説明している。(7)

勤労観：日常生活の中での役割の理解や考え方と役割を果たそうとする態度、および役割を果たす意味やその内容についての考え方(価値観)

職業観：職業についての理解や考え方と職業に就こうとする態度、および職業をとおして果たす役割の意味やその内容についての考え方(価値観)

このことから、勤労観と職業観は、「役割」を共通のキーワードとしてつながっていることがわかる。ただし、勤労観は、役割遂行への意欲や責任感などといった情意・態度面が重視されるのに対し、職業観は、職業に就こうとする態度を含めた、様々な職業やその役割についての理解・認識面が重視される点は留意しておきたい。

これまで中学校や高等学校などで行われてきた進路指導や職業教育は、その目的を、学業成績による進路の選択や、卒業後の進学や就職といった、進路保障に集中した内容になりがちであったのではないだろうか。キャリア教育が、こういった進路指導や職業教育と同一のものとしてとらられている傾向は、様々な調査結果からもうかがえる。しかし、キャリア教育は、個別の進路選択の支援だけをめざすのではなく、子どもの発達段階に応じて勤労観と職業観とを、バランスよく育てていくことが大切だと考える。

図1-1は、三村が示した「勤労観と職業観の構造」(8)を基に、発達段階に応じて、どのようなバランスで「勤労観・職業観」を育てるとよいのかを筆者が考え、示したものである。

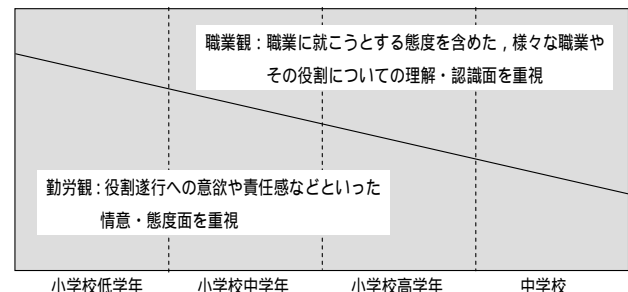


図1-1 発達段階に応じた「勤労観・職業観」の育成

小学校段階では、遊びの中での役、家庭での手伝い、学校の清掃や給食などの当番活動や係活動での役割分担など、役割を幅広くとらえ、体験を通して勤労観を育てることを重視した教育活動を展開していくことが大切である。また、学年が進

むにつれ、学級での役割から学年、学校、地域社会での役割に視野を広げ、自分ができることを見つけ、誰かのために役に立とうとする意欲を高めたり、責任をもって最後まで自分の役目を果たそうとする態度を育てたりすることが重要である。

また、小学校低学年の段階では、勤労観に比べると職業観を育てる教育活動の比重は小さいが、この時期から、地域で働く人の姿を見学したり、話を聞いたり、インタビューしたりする体験的な学習を通して、働く人に目を向け、職業観の基礎を養うことも大切である。「働くこと」の意味を子どもの発達段階に応じて考えさせる機会を設けるということは、小学校低学年の段階からでも決して早過ぎることはない。働く人の姿から学んだことを学級や家庭で生かしたり、学級で実践している取組を学校全体や家庭、地域に広げて実践したりすることは可能な取組であろう。むしろ、早い時期からのこのような経験の積み重ねが、中学校・高等学校での職場体験やインターンシップ、そして卒業時の進路選択などにおいて、良い影響を与えると考える。

中学校段階では、職場体験などを通して、職業そのものと、その役割についての理解を深める職業観を育てることを重視した教育活動を展開し、将来の自分の進路選択や生き方につなげていくことが重要である。また、小学校で培った勤労観がさらに高まるよう自ら工夫したり、学校で学んだことを家庭や地域社会で生かすことができるようにしたりすることも大切である。

このように、子どもの発達段階や実態に応じて、どのようなバランスで勤労観・職業観を育成していけばよいのかを考え、意図的に教育活動を工夫していく必要がある。勤労観は日常生活の中での役割に対する価値観であり、職業観は職業そのものに対する価値観である。小学校低学年の時期は勤労観を育てる教育活動を重視し、規範意識や成就感なども含めた勤労観を身につけた上で、中学生になる時期に近づくにつれ、望ましい職業観が形成されるよう、社会や職業に目を向けた教育活動を重視していくことが必要だと考える。

では、本市ではどのような取組を進めているのだろうか。

本市では、平成18年2月に『生き方探究教育キャリア教育京都市スタンダード<試案>』(9)(以下、<試案>とする。)が出され、キャリア教育を、「地域・社会とのかかわりの中で生き方を考え、生きる力をはぐくむ『生き方探究教育』」とし

て取組を始めた。平成20年4月には、『京都市キャリア教育スタンダード 生き方探究教育<概要編>』(10)(以下、<概要編>とする。)、『京都市キャリア教育スタンダード 生き方探究教育<実践事例編>』(11)(以下、<実践事例編>とする。)が出され、実践が広がりつつある。

<概要編>には、「社会の中で生きることは『はたらくこと』である」とした上で、生き方探究教育を次のように定義している。(12)

生き方探究教育とは、「生きる力」をどのように社会に役立てるかという自らの生き方を確立する教育である。

これは、生き方探究教育のめざすものは、キャリア教育がめざす「勤労観・職業観の育成」だけでなく、教育改革の基本理念である「生きる力をはぐくむ」ことと重なることを示している。

人や地域・社会とのかかわりの中で、今の自分はどのような姿なのかといった自己の「在り方」を見つめ、将来どのような自分になりたいのかといった自己の「生き方」を考えること、そして、よりよい自己実現をめざす子どもを育てることが生き方探究教育であると考えられる。

また、本市教育委員会は、生き方探究教育でつきたい力である「5つの領域と17の力」(以下、「5領域17の力」とする)(13)を表1-1のように示した。

表1-1 「生き方探究教育」における  
- 5つの領域と17の力 - (京都市教育委員会作成)

共生	(1) 人と共に生きる力 (人間関係形成能力)	自分と他者を理解する力
		コミュニケーションを豊かにする力
		世界に視野を広げる力
	(2) 社会で共に生きる力 (社会参画能力)	地域と共に生きる力
		集団に適応し共に生きる力
		家族と共に生きる力
(3) よりよく判断する力 (意思決定能力)	自らの意思と責任で判断する力	
	自らが考え選択する力	
自立	(4) 情報を集め活用する力 (情報活用能力)	自らの課題を見つけ解決する力
		情報を収集し探索する力
		職業について理解する力
	(5) 自己の夢をつくりあげる力 (自己理解・将来設計能力)	情報技術を活用する力
		自分の社会的役割を認識する力
		計画を企画し実行する力
		心理的な自己自立を図る力
社会的な自己自立を図る力		
意欲的に学ぼうとする力		

これは、「調査報告書」に示された、「キャリア教育における職業的(進路)発達にかかわる諸能力」(14)である4領域8能力<sub>2</sub>に、社会参画能力を加え、『共生』と『自立』を柱とした“5領域17の力”に改編したものである。

『共生』の観点とは、人間はお互いに支え合っ  
て生きているということに自覚し、社会における  
自らの責務を認識し、生き方を探究するというこ  
とである。一方、『自立』の観点とは、個としての  
自己の有り様を認識し、社会とかわりながら主  
体的に生き方を探究するということである。

この二つの観点を柱とした“5領域17の力”を  
意識して、教科等の枠を超え、隣接学年のつな  
がりをも見据えた横断的・系統的な教育活動を展開  
していくことが大切だと考える。

さらに、＜概要編＞は、生き方探究教育を進め  
るに当たって、「小学校からの各発達段階におけ  
る指導のあり方を小・中・高の教育課程全体を見  
直す中で確立しなければならない」(15)と明記し  
ている。このことから、小学校低学年からの勤労  
観・職業観をはぐくむ教育とともに、自分の生き  
方と向き合うことができる教育活動が求められて  
いるということがわかる。また、校種ごとの計画・  
実践だけでは子どものよりよいキャリア発達を十  
分に見取ることは望めない。義務教育の9年間、あ  
るいは高等学校教育も含めた12年間で、子ども  
どのような力をつけたいのかを明確にして、既存  
の教育課程を見直すことが大切だと考える。

以上のことから、国や本市でも示しているよう  
に、小学校段階から、中学校・高等学校段階を見  
据え、子どもの発達段階に応じた生き方探究教育  
を進めることが必要不可欠であることがわかる。

生き方探究教育が求められるわけは、これにと  
どまらない。生き方探究教育を各教科等の中で進  
めることにより、各教科等で学んだことと社会や  
仕事とのつながりを理解することができ、発達段  
階に応じた、望ましい勤労観・職業観が育つから  
である。

小学校における生き方探究教育は、仕事に役立つ  
技術を身につける職業教育や、個別の進学や進  
路選択の援助をする進路指導をめざしているの  
ではない。子どもたち一人一人が夢や希望を実現し  
ていくために必要となるコミュニケーションや情  
報活用、計画実行などの基礎的能力をはぐくむこ  
とをめざしているのである。このことを周知し、  
教育活動を展開していくことが大切だと考える。

また、学校生活から、卒業後の社会生活・職業  
生活へと滑らかに移行できるようにするためには、  
小学校段階から徐々に長い時間をかけて勤労  
観・職業観をはぐくむ経験や、節目節目で立ち止  
まり、自分と向き合う経験を積み重ねていくこと  
が必要である。そこで、「働くこと」「生きること」

にかかわる体験的な学習を教育活動の中に効果的  
に取り入れることが大切だと考える。小学校にお  
いては、生活体験に関連する教育活動が数多くあ  
る。だからこそ、人や社会とのつながりを子ども  
自身が感じ、納得できるようにするために、体験  
的な活動を工夫することが重要だと考える。

小学校での生き方探究教育の取組が、中・高等  
学校での生き方探究教育の展開や卒業後の社会生  
活の過ごし方、そして生き方にも影響を及ぼすと  
いっても過言ではない。将来の生き方や職業への  
夢・希望・あこがれをもち、よりよく生きるため  
の資質や能力、態度の基礎を育成することに主眼  
をおき、小学校における生き方探究教育を進めて  
いくことが、今、求められているのである。

2 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議  
報告書』（文部科学省 2004.1）では、「キャリア教育にお  
ける職業的（進路）発達にかかわる諸能力 - 4領域8能力 - 」  
を次のように示している。

人間関係形成能力	自他の理解能力 コミュニケーション能力
情報活用能力	情報収集・探索能力 職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力 計画実行能力
意思決定能力	選択能力 課題解決能力

## （2）自己の夢をつくりあげる八つの要素

前項でも述べたが、地域・社会とのかかわりの中  
で生き方を考え、生きる力をはぐくむ生き方探究  
教育を進めることが必要である。子どものキャ  
リア発達を考えると、小学校段階とは、将来の生  
き方や職業への夢やあこがれをもち、勤労観・職  
業観や自立的に生きる力の基礎的な資質や能力、  
態度を育成することが大切な時期である。

そこで、昨年度の研究成果を踏まえ、今年度も、  
「自己の夢をつくりあげる力（自己理解能力・将  
来設計能力）」の領域に焦点を当て、自分の特性を  
認識し、将来展望をもって努力する子どもを育て  
る実践を進める必要があると考えた。「夢をもち、  
つくりあげる」ということは、「生きる力を身につ  
け、よりよい自己実現をめざす」ということにつ  
ながると考えたからである。

＜概要編＞によると、「自己の夢をつくりあげ  
る力」とは、「自己理解能力」「将来設計能力」を  
めざす力とし、次のように示されている。(16)

夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、  
社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の夢  
（将来）の実現を設計する力

子どもが将来の生き方や職業への夢や希望、つまり将来展望をもつためには、まず、「今の自分はどうのような自分なのか」「どのような力がついたのか」「何が課題で、どのような努力を必要とするのか」「自分の特性は何なのか」などといった、自分自身のことを知る、自己理解が必要である。その上で、「このような自分になりたい」という将来像を描くことができる。

また、「なりたい自分」や「あこがれの姿」に近づくために、見通しをもち、現状を踏まえながら計画を立てて行動するという将来設計が大切である。ここでいう「将来」とは、何年も先の“大人になったとき”だけではなく、“1年先や1ヶ月先”“明日や次時”なども含むととらえている。

そこで、今年度も、昨年度の研究を基に整理し直した「自己の夢をつくりあげる力」をはぐくむ八つの要素を各教科等の教育活動に意図的に取り入れ、工夫ある学習計画を立案することにした。

図1-2は、「自己の夢をつくりあげる力」をはぐくむ要素についてまとめたものである。

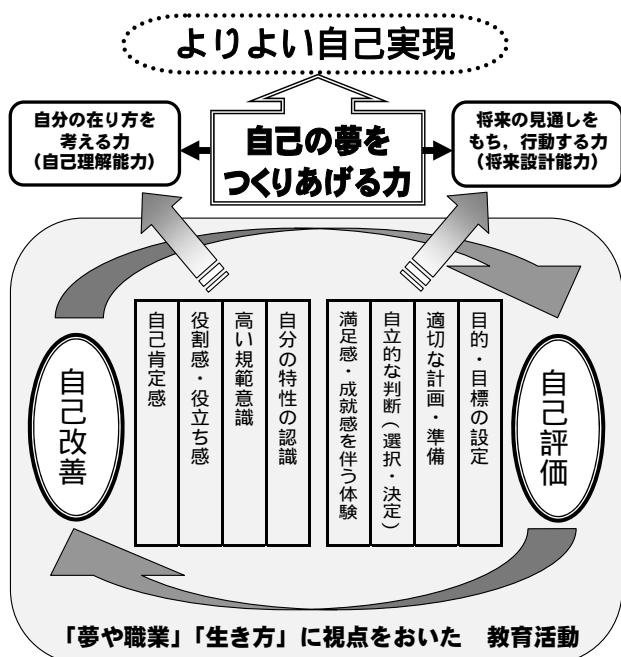


図1-2 「自己の夢をつくりあげる力」をはぐくむ要素

“自分の在り方を考える力（自己理解能力）”は、次の四つの要素によってはぐくまれる。

#### 自分の特性の認識

現在のありのままの自分を見つめ、自分の良さや適性、克服すべき課題などを知ることである。周りの人や家庭、地域、社会などの様々ななかかわりの中で気づき、自分自身の認識を深めていくことが大切である。

#### 高い規範意識

社会的自立に欠くことのできない、公共心や自立心を含む規範意識を身につけ、高めていくということである。基本的な生活習慣や物事の善悪の判断、時間や約束、きまりを守るなどの道徳性や感性に働きかけることも大切である。

#### 役割感・役立ち感

様々な人や社会とかかわる体験を積み重ねる中で、自分の役割や貢献、社会の中の一員であることに気づくことである。このことは、自分の存在の意味や価値を知ることにつながる。

#### 自己肯定感

自分のありのままの姿を受け入れ、自分のことを肯定的にとらえるということである。自分の長所や課題をプラスの発想でとらえることにより、自信や向上心が高まる。

また、“将来の見通しをもち、行動する力（将来設計能力）”は、次の四つの要素によってはぐくまれる。

#### 目的・目標の設定

何のためにこの活動をするのか、何をねらいにして学習を進めるのかということ、子ども自身が明確にもつということである。学習の見通しやゴールの姿も見えると、子どもの学習意欲が高まる。目標については、集団全体のめあてに基づき、一人一人に応じた個人内目標を設定することが大切である。

#### 適切な計画・準備

目標に向かってどのような手順を追い、学習活動を進めていけばよいのかを考えるということである。段階を踏んだ計画を立てることにより具体的な行動が見えてくるため、ここでも学ぶことへの関心・意欲の向上が期待される。

#### 自立的な判断（選択・決定）

子どもが自分自身で課題解決のための方法を考え、様々な選択肢を比較検討し、自分に適しているものを選び、決定することである。主体的な行動をとることにより、自分の行動に責任をとるということにもつながる。

#### 満足感・成就感を伴う体験

学校や地域、社会の様々な人と交流したり、集団宿泊活動・職場体験・奉仕体験など、子どもの発達段階に応じた体験活動を行ったりし、その中で成功する満足感ややり遂げる成就感、そして失敗体験からの学びを体感することである。

以上の八つの要素を、「夢や職業」「生き方」に視点をのせた教育活動の中に意図的に組み入れていくことが大切になる。このことにより、自分の在り方を考える“自己理解能力”と、将来の見通しをもち、行動する“将来設計能力”がはぐくまれると考えたからである。

これらの要素を組み入れた教育活動を充実させるには、各活動において適切な「自己評価」をし、その評価を基に、積極的な「自己改善」を試みることを繰り返し行う必要がある。これらは、学習のまとめの段階で行うだけでなく、学習過程の途中でも適宜行うことが大切である。また、このような取組を、特定の教科や単元だけでなく、すべての教育活動で意識し、継続して実践することが必要である。そのことにより、自己の夢や希望が現実のものになるよう前向きに努力していこうとする子どもが育成できると考えるからである。

## 第2節 生き方探究教育を実践するためには

### (1) 発達段階に応じた「めざす子どもの姿」

前節でも述べてきたが、小学校における生き方探究教育は、中学校や高等学校でいうところの職業教育や進路指導と目標を同じにするものではない。子どもたち一人一人が夢や希望をもち、その実現に向けてよりよく生きるための資質や能力、態度の基礎を育成することをめざすものである。

そこで、生き方探究教育を各教科等の授業の中で実践していくためには、初めに、「めざす子どもの姿」を明らかにしなければならないと考えた。子どものキャリア発達を考慮し、実態を把握した上で指導者の願いを加味した育てたい子どもの姿をイメージすること、そして、それを基に学習計画を立案していくことが大切であると考えたからである。

文部科学省は、「調査報告書」に小学校・中学校・高等学校の段階別に見た職業的（進路）発達段階と職業的（進路）発達課題を示している。その中で、小学校の職業的（進路）発達段階を「進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期」(17)とした上で、小学校におけるキャリア教育の目標を次のように示している。(18)

自己及び他者への積極的関心の形成・発達  
身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上  
夢や希望、憧れる自己イメージの獲得  
勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成

また、発達段階に応じた各学年の目標については、次のように示している。(19)

低学年：自分の好きなこと、得意なこと、できることを増やし、様々な活動への興味・関心を高めながら、意欲と自信を持って活動できるようにする。

中学年：友達のをさを認め、協力して活動する中で、自分の持ち味や役割を自覚することができるようになる。

高学年：苦しいことや初めて経験することに失敗を恐れず取り組み、そのことが集団の中で役立つ喜びや自分への自信につながるようになる。

一方、＜概要編＞は、「共生と自立を柱とする5つの領域と17の力の学習プログラム枠組み(例)」(20)の中で、保育所・幼稚園から高等学校までの各段階における発達のイメージ例と具体的な活動例を示した。

これらを参考に、＜概要編＞と同様、保育所・幼稚園から高等学校までの“5領域17の力”にかかわるキャリア発達課題を整理し直し、一覧表を作成した。(全表は付表に示す。)具体的には、次の二点に留意して、見直しを行った。

発達の時期に応じた、系統的な課題を設定すること。  
文言については、簡潔でわかりやすくすること。

次頁の表1-2は、“5領域17の力”にかかわるキャリア発達課題(例)のうち、小学校段階と中学校段階を抜粋したものである。

表の縦軸は、生き方探究教育で育てたい“5領域17の力”を示し、横軸は、校種・学年を示している。「17の力」それぞれにおいて、各発達段階ではどのような子どもの姿をめざすのかがひとめでわかるようになっている。また、当該学年の2年間、あるいは3年間でどのような子どもに育てていけばよいのかがわかり、指導者や子ども自身の評価の観点にもなる。さらに、隣接する発達段階の課題がわかり、保育所・幼稚園から高等学校までの就学期間でどのような子どもの姿をイメージして教育活動を展開していけばよいのかを意識することができる。

以上のような、“5領域17の力”にかかわるキャリア発達課題を明確にし、それを基に学習計画を立て、授業を展開していくことが必要だと考える。なお、ここで提示したものは一つの例であり、キャリア発達課題については、各学校の実態に応じて作成されることが望ましい。



表1-2 “5領域17の力”にかかわるキャリア発達課題(例)の一部

キャリア発達の時期と目標	小学校（勤労観の基礎形成の時期）			中学校	
	《1・2年》 * 自分の役割に興味をもつ。	《3・4年》 * 自分の役割に責任をもつ。 * 身近な地域にさまざまな仕事があることを知る。	《5・6年》 * 自己を認め、将来の夢のイメージをつくる。 * 働くことの大切さや苦労や喜びを知る。	（職業に対する現実的探索の時期） * 自分自身の将来の夢や課題を見つけ、職業体験に取り組み、将来の夢や職業についての関心・意欲を高める。	
生き方探究教育で育てたい5領域17の力					
人と共に生きる力	①自分と他者を理解する力	◇友だちの良さに気づく。 ◇お世話になった人に感謝する。	◇お互いの良さを認める。 ◇自分の生活を支えている人に感謝の気持ちをもつ。	◇自分と異なる考えを理解する。 ◇人の優しさや思いやりを理解する。	◇お互いの個性を尊重し、他者の長所や感情を理解する。 ◇自分の言動が相手に影響することを理解する。
	②コミュニケーションを豊かにする力	◇自分から気持ちの良いあいさつや返事をする。 ◇自分の考えや思いを伝えたり、他者の話を聞いたりする。	◇協力して、学習や活動に取り組む。 ◇友だちの気持ちや考えを理解しようとする。	◇相手の立場に立って考え、行動する。 ◇異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。	◇人間関係の大切さを理解し、積極的に関係を築く。 ◇礼儀正しいあいさつと、マナーや社会常識を理解する。
	③世界に視野を広げる力	◇いろいろな国の言葉や文化にふれる。	◇いろいろな国の人々の生活に関心をもつ。 ◇いろいろな国の言葉を使ってみる。	◇異文化交流を通して、いろいろな国の文化に親しむ。 ◇いろいろな国の言葉を使ってみる。	◇メディアを通して世界の様子を知る。 ◇いろいろな国の言葉を使って、他の国の人とかわかる。
社会で共に生きる力	④地域と共に生きる力	◇自分が住んでいる地域について知る。 ◇地域の活動に参加する。	◇住んでいる地域の様々な様子を実際に見たり聞いたりする。 ◇地域の活動や伝統産業の体験に参加する。	◇地域の活動に参加し、共に行動する喜びを知る。 ◇地域の伝統を知り、産業への関心をもつ。	◇地域の伝統を大切にし、地域の活動に積極的に参加する。 ◇楽しんで行動できる態度を身につける。
	⑤集団に適応し共に生きる力	◇友だちや集団と共に行動することの楽しさを知る。	◇身近な集団の中での役割を考え、行動する。	◇所属する集団や公共のために自分ができることや役割を考え、行動する。	◇集団の中での自分の役割を把握し、積極的に行動する。
	⑥家族と共に生きる力	◇家族の役に立つ喜びを知る。	◇家で自分のできる仕事を、責任をもってする。	◇家族の幸せを求め、進んで役に立とうとする。 ◇家族と共に生きていくことを自覚する。	◇より良い家族形成のために、役割を見つけ行動する。
よりよく判断する力	⑦自らの意思と責任で判断する力	◇自分なりの思いをもつ。 ◇良いことと悪いことがわかる。	◇自分のやりたいこと、良いと思うことを考え、取り組む。 ◇してはいけないことがわかり、自制する。	◇自分の行動について自己決定し、実践する。 ◇ルールやマナーを考えて行動する。	◇アドバイスを受けながら、自分に必要なことを自ら判断する。 ◇自己の選択の過程や結果には責任が伴うことを理解する。
	⑧自らが考え選択する力	◇自分の好きなもの、大切なものをさがす。	◇理由をもって選択をする。	◇自分なりに納得できる選択をする。	◇自己の個性や興味・関心に基づき、より良い選択をする。 ◇いろいろな人との相談を基に道路を選択する。
	⑨自らの課題を見つけ解決する力	◇自分で課題を見つけ、やってみる。	◇見つけた課題を、自分の力で解決しようとする。	◇自分に合った課題を見つけ、解決に向けて主体的に取り組む。 ◇夢や希望をもち、実現をめざして努力する。	◇より良い生き方をめざす上での課題を見出し、主体的に解決する。
情報を活用する力	⑩情報を収集し探索する力	◇知りたいことや興味のあることを本や図鑑でさがす。	◇見学したり話を聞いたりして、情報を集める。	◇インタビューをしたりICTを活用したりして、必要な情報を集める。	◇進学・就職の際に求められる学習歴や資格の概略がわかる。 ◇生き方や道路についての情報を収集・整理し、活用する。
	⑪職業について理解する力	◇身近で働く人々の様子がわかる。 ◇仕事の役割を分担することの大切さがわかる。	◇いろいろな職業や生き方があることがわかる。 ◇係の仕事等を通して、働くことの大切さや楽しさがわかる。	◇職場見学等を通して、働くことの大切さや苦労がわかる。 ◇働くことの意義や社会奉仕する喜びを知る。	◇体験を通して勤労の意義や働く人々の様々な思いを理解する。
	⑫情報技術を活用する力	◇ICTや情報モラルなどに興味・関心をもつ。	◇ICTを使って調べする方法を知る。 ◇情報モラルを身につける。	◇ICTを活用して必要な情報を選択する。 ◇コンピュータを使ってプレゼンテーションをする。	◇様々なICTを活用して、調査したり資料を選択したりする。 ◇様々なICTを使ってプレゼンテーションをする。
自己の夢をつくりあげる力	⑬自分の社会的役割を認識する力	◇いろいろな役割があることがわかる。	◇お互いの役割や分担の必要性がわかる。	◇進んで役割を受けもち、責任を果たそうとする。	◇職業の社会的役割や意義を理解し、生き方を考える。
	⑭計画を企画し実行する力	◇進んで準備や片づけをする。	◇計画を立てることの必要性がわかる。	◇先を見通し、的確に行動する。	◇自己実現の目的に合った計画を設定し、努力する。
	⑮心理的な自己自立を図る力	◇のびのびと生活する。 ◇自分の思いをもつ。	◇自分の良いところを見つける。 ◇将来の夢や希望を考える。	◇自分の特徴(長所・短所)がわかる。 ◇将来のことを考える大切さがわかる。	◇自分の特徴と将来の目標を結びつけて、方向性をもつ。
	⑯社会的な自己自立を図る力	◇約束や時間を守る。	◇進んでまきりや規則を守る。	◇働くことや学ぶことの意義がわかる。	◇将来の夢と、自分にふさわしい道路とを結びつけて考える。
	⑰意欲的に学ぼうとする力	◇楽しく学習に取り組む。	◇自分から進んで学習する。	◇より高い自己目標をもち、実現に向けて努力する。	◇今の学習が将来の生き方にかかわることを理解する。

※「京都市キャリア教育スタンダード 生き方探究教育 概要編」にある、「共生と自立を柱とする5つの領域と17の力の学習プログラム枠組み(例)」を参考に作成した。  
(作成:京都市総合教育センター 研究課 河野 由佳)

(2) 各教科等の中で進める生き方探究教育

生き方探究教育は、決して特別なものではない。“生き方探究教育という新しい教育活動を導入し、展開する”のではなく、“生き方探究教育の視点で教育活動を整理し直し、充実させる”ととらえることが大切だと考える。

<概要編>には、「教育課程のさらなる改善」として、「子どもたちのキャリア発達を支援する観点に立って、(略)各校種連携のもと、教育課程の在り方を見直し、創意工夫ある教育活動を展開しなければならない」(21)とある。

各教科等には、その特性に応じたねらいがある。生き方探究教育の視点で整理し直すということは、別のねらいを新たに設定したり、既に行われている教育活動を大幅に変更したりするもの

ではない。“5領域17の力”に関連のあるものを取り上げ、目標とつけたたい力を整理していくことで、バランスよくキャリア発達を支援していくことができるのだと考える。

既存の教育課程を生き方探究教育の視点で見直す際、大切になってくるのは、自分の“在り方”を見つめ、自分のこれからの“生き方”を考える活動を意識することである。その上で、教科や各領域の特性を生かした生き方探究教育を展開することが重要なポイントとなる。次頁の図1-3は、これまでの教育活動を生き方探究教育の視点で見直すポイントを示したものである。

小学校の教育活動の中には、よりよく生活するための学習や、勤労観・職業観にかかわる学習内容が数多くある。この内容を“5領域17の力”に視

点を当てて整理し直し、前述した見直しのポイントを意識して、創意工夫ある教育活動を展開していくことが必要だと考える。これにより、生き方探究教育でつきたい力を軸にしたそれぞれの学習内容の関連が明らかになり、横断的な教育活動が展開できると考えるからである。

そこで、各教科等と“5領域17の力”との関連がわかるものが必要になってくると考え、五つの領域ごとに小学校1～6学年までの内容関連表(例)を作成した。

表1-3は、第6学年の各教科等と「自己の夢をつくりあげる力」との関連表(例)である。これは、図1-3で示したポイントに従って教育活動を見直した一つの例であり、総合的な学習の時間の内容を加えたり、学校の実態に応じて作成したりすることが望ましい。

以上のことから、自己の夢をつくりあげる教育活動の充実を図るため、生き方探究教育にかかわる各教科等の授業実践例を提示していく必要があると考えた。第2章では、今実践されている教育活動を見直す視点として、体験的な学習を生かした授業改善のポイントや、子どもへの支援の工夫について述べる。

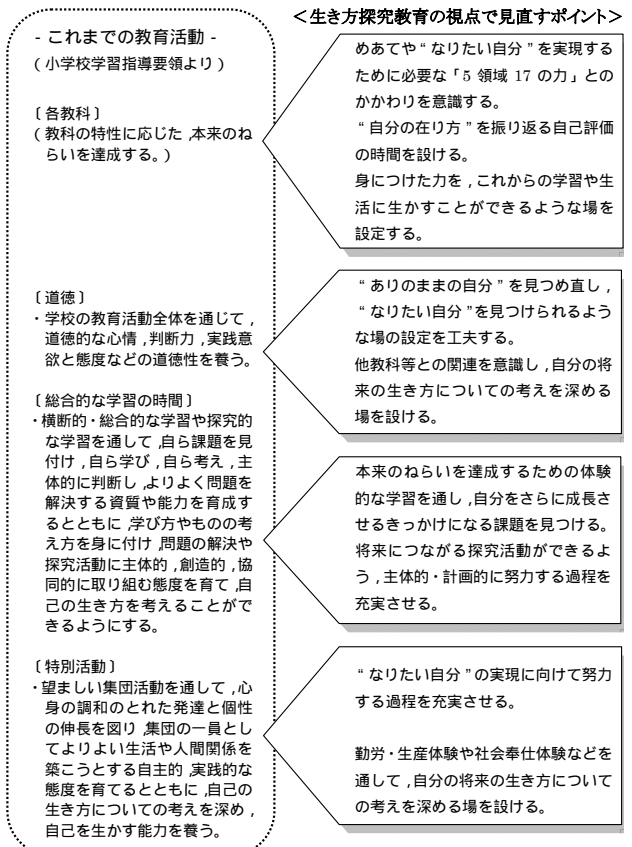


図1-3 生き方探究教育の視点で見直すポイント

表1-3 第6学年 各教科等と「自己の夢をつくりあげる力」との関連表(例)

第6学年 生き方探究教育 各教科等と「自己の夢をつくりあげる力」との関連表(例)		〇…単元の目標、学習のねらい *…「自己理解能力」にかかわるキャリア発達課題 ※…「将来設計能力」にかかわるキャリア発達課題		
月	自己理解能力	将来設計能力	月	
4	(社会)「日本の歴史」(68) ○国家・社会の発展に大きな働きをした先人の働きや優れた文化遺産に関心をもち、自分たちの生活の歴史的背景を理解したり、各時代において様々な課題の解決や人々の願いの実現に向けて努力してきた先人の働きを共感的に理解したりできるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切に、国を愛する心情をもつようとする。 * 先人の働きを共感的に理解し、自分の在り方を見つめ直す。	(特別活動) (学級活動) 「最上級生になって」 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。 ※先を見通し、的確に行動する。	(国語)「続けてみよう」(1) ○課題を決めて一年間を通じて、学習体験や読書体験を整理したり、調べたことや自分の考えをまとめたりできるようにする。 ※自分が決めた活動課題を継続して追究するための計画を立てる。 (国語)「相手の意図を聞き取り、自分の主張を伝えよう」(6) ○討論の進め方や効果的な説得の仕方を理解し、計画的に話し合うことができるようにする。 ※見直しをもって学習課題を追究する。	(特別活動) (児童会活動) 「委員会の所属」 ※働くことや学ぶことの意義を考える。 (特別活動) (学校行事) 「修学旅行」 ※先を見通し、的確に行動する。 * 進んで役割を受けもち、責任をもって果たそうとする。 ※働くことや学ぶことの意義を考える。
5	(道徳)「目標に向かって：ほくの古文書写真」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(特別活動) (学級活動) 「夏休みの生活」 * 進んで役割を受けもち、責任をもって果たそうとする。 ※働くことや学ぶことの意義がわかる。 ※規則正しい生活を心がける。	(国語)「かけがえのない命：祖母のつえ」3-(2) ○生命がかけがえのないものであることを知り、生命を大切に力強く生きようとする態度を養う。 ※将来のことを考える大切さがわかる。	
6	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(特別活動) (学級活動) 「卒業に向けて」(卒業式) * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。 ※先を見通し、的確に行動する。 ※将来のことを考える大切さがわかる。	(家庭)「まかせてね！きょうのごはん」(11) ○これまでの学習を生かして、調理実習計画を立てて、安全に気をつけて調理実習することができる。 ※見直しをもって学習課題を追究する。	
7	(道徳)「個性の伸長：坂本龍馬～少年時代～」1-(6) ○自分の特徴を知って、悪いところを改め、良いところを積極的に伸ばそうとする態度を養う。 * 自分の特徴(長所や短所)に気づく。	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(家庭)「伝えよう！ありがとうの気持ち」(10) ○家族やお世話になった人たちのためにできることを計画し、実践できる。 ※見直しをもって学習課題を追究する。	
8・9	(道徳)「個性の伸長：坂本龍馬～少年時代～」1-(6) ○自分の特徴を知って、悪いところを改め、良いところを積極的に伸ばそうとする態度を養う。 * 自分の特徴(長所や短所)に気づく。	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「助け合って生きる：阪神淡路大震災の被災地で」4-(4) ○社会人は人々の支え合いの上に成り立っていることを知り、すすんで公共のために働くこととする態度を養う。 ※働くことの意義がわかる。	8・9
10	(国語)「表現を味わい、豊かに想像しよう：やまなし」(8) ○優れた表現を読み味わい、情景を想像豊かに読み取り、作者の思いや生き方などの見方について考えることができるようにする。 * 自分の在り方について見つめ直す。	(道徳)「志に向かって：鑑真和尚」1-(2) ○自分の目標に向かって困難に負けず、最後までやり遂げようとする心情を育てる。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(家庭)「伝えよう！ありがとうの気持ち」(10) ○家族やお世話になった人たちのためにできることを計画し、実践できる。 ※見直しをもって学習課題を追究する。	(特別活動) (学級活動以外の時間) 休みの生活 * 進んで役割を受けもち、責任をもって果たそうとする。 ※働くことや学ぶことの意義がわかる。 ※規則正しい生活を心がける。
11	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「助け合って生きる：阪神淡路大震災の被災地で」4-(4) ○社会人は人々の支え合いの上に成り立っていることを知り、すすんで公共のために働くこととする態度を養う。 ※働くことの意義がわかる。	
12	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「助け合って生きる：阪神淡路大震災の被災地で」4-(4) ○社会人は人々の支え合いの上に成り立っていることを知り、すすんで公共のために働くこととする態度を養う。 ※働くことの意義がわかる。	
1	(社会)「世界の中の日本」(15) ○結び付きを深める世界の中で、世界の人の人々と相互に理解を深め合い、平和な国際社会の実現を目指して、我が国が国際社会の中で重要な役割を果たしていることを考え、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さを自覚できるようにする。 * 自分の在り方について見つめ直す。	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「助け合って生きる：阪神淡路大震災の被災地で」4-(4) ○社会人は人々の支え合いの上に成り立っていることを知り、すすんで公共のために働くこととする態度を養う。 ※働くことの意義がわかる。	
2	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「助け合って生きる：阪神淡路大震災の被災地で」4-(4) ○社会人は人々の支え合いの上に成り立っていることを知り、すすんで公共のために働くこととする態度を養う。 ※働くことの意義がわかる。	
3	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「自覚をもって：坂本龍馬」1-(2) ○より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を養う。 * 自己目標をもち、実現に向けて努力する。	(道徳)「助け合って生きる：阪神淡路大震災の被災地で」4-(4) ○社会人は人々の支え合いの上に成り立っていることを知り、すすんで公共のために働くこととする態度を養う。 ※働くことの意義がわかる。	

- (1) 文部科学省『ワクワク子育て 家庭教育手帳 小学生(低学年～中学年)編』 2009.4 p.80
- (2) 中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(審議経過報告)』 2009.7 p.2
- (3) 文部科学省『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』 2004.1 p.7
- (4) 文部科学省『学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに幼稚園教育要領の全部を改正する告示,小学校学習指導要領の全部を改正する告示及び中学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について(通知)』 2008.3
- (5) 文部科学省『小学校学習指導要領』 2008.3 p.13
- (6) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)』 2002.11 p.21
- (7) 三村隆男『キャリア教育入門』実業之日本社 2004.10 p.65
- (8) 前掲(7) p.65
- (9) 京都市教育委員会『生き方探究教育 キャリア教育京都市スタンダード<試案>』 2006.2
- (10) 京都市教育委員会『京都市キャリア教育スタンダード 生き方探究教育<概要編>』 2008.4
- (11) 京都市教育委員会『京都市キャリア教育スタンダード 生き方探究教育<実践事例編>』 2008.4
- (12) 前掲(10) p.2
- (13) 前掲(10) p.6
- (14) 前掲(6) 別紙
- (15) 前掲(10) p.2
- (16) 前掲(10) p.8
- (17) 前掲(6) 別紙
- (18) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター『自分に気付き,未来を築くキャリア教育 小学校におけるキャリア教育推進のために』 2009.3 p.3
- (19) 前掲(18) pp.4～9
- (20) 前掲(10) pp.9～10
- (21) 前掲(10) p.5

## 第2章 体験的な学習を生かした

### 生き方探究教育

#### 第1節 「共生と自立」の視点に立った

##### 体験的な学習とは

##### (1) 「体験的な学習」のとらえ方

体験的な学習は、これまでも重要な位置づけがされてきている。昭和51年の教育課程審議会答申は、特別活動において“体験的な活動”を重視するよう打ち出した(22)。また、昭和62年の同答申は、「生活科」を創設し、各教科等において“体験的な学習や問題解決学習”を充実させることを提言した(23)。さらに、平成11年の学習指導要領の改訂では、「総合的な学習の時間」が導入され、自ら課題を見つけ自ら学ぶ“課題探究を重視した体

験的な学習”が推奨された(24)。

今回の学習指導要領の改訂は、「体験活動と言語活動」をこれまで以上に充実させていくことがポイントとなっている(25)。これに先立ち、中央教育審議会答申では、「体験的な学習やキャリア教育などが、学ぶ意義を認識するのに必要である」とした上で、子どもたちの社会性と豊かな人間性の育成を目的とした道徳教育を充実するために、小学校では集団宿泊学習、中学校では職場体験活動、高等学校では奉仕体験活動や就業体験活動を重点的に推進することを提唱している(26)。これらは、人や社会とのかかわりの中で、生き方を考え、生きる力をはぐくむことにつながるものであり、望ましい勤労観・職業観をはぐくむ生き方探究教育のねらいとも合致するものである。

第1章でも述べたが、生き方探究教育を進めるに当たっては、人や社会とのつながりを子ども自身が感じ、納得できるようにすることが大切である。そのために、小学校段階から、「働くこと」「生きること」にかかわる体験的な学習を教育活動の中に効果的に取り入れることが必要だと考えた。

文部科学省は、キャリア教育にかかわる体験活動等の意義(27)について、次のように示している。

体験活動等には、職業や仕事の世界についての具体的・現実的理解の促進、勤労観・職業観の形成、自己の可能性や適性の理解、自己有用感等の獲得、学ぶことの意義の理解と学習意欲の向上等、様々な教育効果が期待され、(中略)このほか、学校と社会をつなぐという重要な役割がある。

体験的な学習を充実させることは、子どもたちが様々な知識・技能を習得する機会となるだけでなく、生活や現実社会への興味・関心を向上させることにつながる。また、課題を発見し、主体的に探究して解決をめざそうとする能力を育てることは、学力の向上にもつながる。さらに、実践化・行動化することにより、成就感や満足感を得ることができたり、自分を見つめ直し、自己理解を深めるきっかけになったりする。社会性やコミュニケーション能力の育成、豊かな人間性や価値観の形成といったことも期待できる。

このように、自分自身と他者とのかかわり、生活や社会との関連に気づくことができるような体験的な学習を充実させていくことが、生き方探究教育を進めていく上で求められていると考える。

ここで、体験的な学習の取組の現状について述べることにする。

体験は、対象とのかかわり方において、三つに

分けることができるであろう。一つめは、子ども自身が対象となる物事に実際にかかわる「直接体験」、二つめは、写真や映像などの媒体を介して感覚的に学ぶ「間接体験」、三つめは、模型やシミュレーションなどを通して学ぶ「疑似体験」である。

ICT技術の発達により、コンピュータ・インターネットなどを使った「間接体験」や「疑似体験」は、大変身近なものとなってきた。教室にいながらにして、世界中のニュースが瞬時にわかる時代であり、各教科等の授業の中で、映像などを使って見学や実験などの疑似体験を一斉に行うことも可能である。体験に要する時間は設定した時間内で済むので効率がよく、準備や片づけに要する手間も軽減できる。また、体験を繰り返すことも可能である。今後もこれらの特性を生かして、効果的に間接体験や疑似体験を教育活動の中に取り入れていくことが大切だと考える。

その一方、近年、都市化や少子化、人間関係の希薄化などが進む中で、人や社会、自然などと直接ふれあう「直接体験」が乏しくなっているのではないかという声もある。直接体験から学ぶ機会が減少することにより、迷いながら物事を決定したり、失敗して自分の行動を省みたりすることがなくなってきたと思われる。これらのことが、青少年の精神的・社会的自立の遅れや勤労観・職業観の未熟さにつながり、ニートやフリーター、早期離職者などを生み出すきっかけになっているのではないだろうか。直接体験の減少がもたらすこれらの問題を解決するために、人とのかわりや自然とのふれあいといった様々な体験を通して、豊かな心を育てることが必要だと考える。

これらの、体験を伴った活動や学習が取り込まれた経緯と現状を踏まえた上で、生き方探究教育を進める上での「体験的な学習」のとりえ方について、整理して述べたいと思う。

「体験的な学習」は、二つの視点における活動から成り立つと考える。一つは、主に教室外の地域や社会で行う、学習対象という視点で分類した『体験活動』である。具体的には、以下のような活動例が挙げられる。

- 生活体験（清掃活動、買い物体験…）
- 自然体験（秋見つけ、川遊び…）
- 社会体験（職場体験、奉仕体験…）
- 伝統文化体験（茶道体験、異文化交流…）など

地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流、長期宿泊活動や勤労体験なども、『体験活動』の中に含まれると考える。これらの活動は、集団行動の

在り方や公衆道徳、役割意識を学んだり、人や社会とのかわりや働くことの尊さを実感し、責任感や連帯感、社会貢献の意識を育てたりすることもできるだろう。

もう一つは、主に教科学習の一部、または延長として、教室内や現地に出かけて行う、学習形態という視点で分類した『学習活動』である。具体的には、以下のような活動例が挙げられる。

- 見学や調査（工場見学、インタビュー…）
- 発表や討論（パネルディスカッション、討論会…）
- ものづくりや生産活動（紙すき、和菓子づくり…）
- 観察や実験（栽培、飼育…） など

感じ取ったことを身体表現したり、具体物を操作したりする活動も、『学習活動』の中に含まれる。これらの活動は、知識をはじめ、意欲、思考力、判断力、表現力などの学力をより確かなものにすることができるだろう。

本研究では、これらの多様な活動を総称して、「体験的な学習」ととらえることにする。『体験活動』と『学習活動』のどちらも、生き方を考え、生きる力をはぐくむ生き方探究教育を進める上で大切な活動である。体験的な学習を各教科等の学習過程の中に効果的に組み入れることにより、子ども自身が体全体を使って学んだことが、生活や社会や自然と結びついていることに気づき、主体的に学ぶ能力を身につけ、学ぶことの楽しさや成就感を体感することができると思う。

体験的な学習は、特定の教科等に限定して行うというものではなく、すべての教育活動において、横断的・総合的に取り組むことが大切である。各教科等によって体験的な学習の取り組み方に偏りがあったり、イベント的な単発の活動で終わったりしたのでは、子どもたちが主体的に学び、その学びを将来に生かしていこうとする姿は望めないと思われる。各教科等で習得した知識や技能を体験的な学習において活用し、さらに主体的に探究していくといった学習活動を展開していくことが大切であると思う。

生き方探究教育を進めていく上で、「共生と自立」の観点が重要である。そこで、この観点に立った体験的な学習とはどのようなものなのかを考え、これらを意図的・計画的に組み入れた教育活動を展開することが必要である。このことは、「学ぶこと」や「生きること」の意義を子ども自身が認識することにつながると考えるからである。すなわち、生き方探究教育では、体験的な学習をどのように組み入れていくかが大切になる。

## (2)「体験的な学習」の組み立て方

小学校における体験的な学習は、様々な人との出会いや地域社会とのかかわりを通して、学びへの関心・意欲を高め、社会へと視野を広げるきっかけになる。体験的な学習は、「学びと生活」「学校と社会」を結びつける重要な役割を担うものであると考える。その際、活動を数多く取り入れて体験そのものを目的とするのではなく、各教科等の学習の目的を達成するための手段の一つとして、体験的な学習をとらえることが大切になってくる。習得した知識や技能を体験的な学習において活用し、主体的に探究するといった学習を展開することは、子ども一人一人が身につけた力をこれからの学習や生活に生かしたり、将来における「働くこと」「生きること」を考えたりする上で、大きな役割を果たすと考えるからである。

例えば、家庭科の学習で家の仕事調べをした後、調理実習や清掃活動を行い、実践の感想交流をするといった体験的な学習をすることによって、簡単な調理や清掃の仕方を理解したり、家庭での自分の役割に気づいたり、家族に対する感謝の気持ちを高めたりすることができると思われる。また、自分にできることを積極的に実践していこうとする態度を育てることも期待できる。教科書に書いてある知識を暗記して、調理の方法や掃除用具の選び方を覚えるだけでは、自分の生活に生かし、行動化することにはつながらないであろう。

そのためには、自然体験や社会体験などの『体験活動』だけでなく、各教科等の学習の中にも、操作や表現活動などの『学習活動』を取り入れることが必要になる。すべての教育活動において、多様な体験的な学習を行うことが、子ども一人一人に「生きる力」をつけるための豊かな経験を積むことにつながると考えるからである。

また、『共生』と『自立』の二つの観点を意識して体験的な学習を行うことが必要であると考えられる。生き方探究教育においてつきたい力である“5領域17の力”は、「共生と自立」を柱として設定されている。『共生』の観点とは、人間はお互いに支え合って生きているという自覚や、社会における自らの責務を認識することであり、『自立』の観点とは、個としての自己の在り様を認識し、社会とかわりながら主体的に生きるということである。体験的な学習を通して、各教科等の特性に応じたねらいに迫ることは大切なことであるが、それに加え、友だちと協力して活動に取り組むなど

の『共生』の観点や、積極的に活動に参加して課題解決に取り組むなどの『自立』の観点を意識した学習場面を設定することが必要である。このことが、体験的な学習を通して、生き方探究教育を充実させることにつながると考える。

以上のことを踏まえ、体験的な学習を組み立てる際、留意しなければならないポイントを次のように考えた。

### <発達段階に応じた取組の設定>

生き方探究教育は、小・中・高等学校を通じて、組織的・系統的に計画していくことが必要とされており、生き方探究教育にかかわる体験的な学習についても、つきたい力である“5領域17の力”を基に、各発達段階に応じた体験的な学習を組み立てることが必要であると考えられる。このことが、子どものよりよいキャリア発達の形成につながると期待できる。

下記のものは、生き方探究教育における体験的な学習の意義を、発達段階ごとに示したものである。これは、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが示した「小学校・中学校・高等学校の各学校段階における体験活動とキャリア教育」(28)を参考にし、筆者が作成したものである。

#### <生き方探究教育における体験的な学習の意義>

##### 【小学校低学年】

活動において様々な気付きをもち、自分たちの生活とつなげていこうとする態度が育つ。

##### 【小学校中学年】

活動と自分とのかかわりを明確にもつことで、主体的に取り組もうとする態度が育つ。

##### 【小学校高学年】

自分の活動を世の中の人々の活動と重ね合わせ、人や社会とのつながりを理解しようとする態度が育つ。

##### 【中学校】

活動の成果や自分の考えを表現し、他者や地域社会に発信していくことで、活動の意味や学ぶ意義を考えようとする態度が育つ。

##### 【高等学校】

地域社会において役割や責任を担う活動を行い、自分の在り方や将来について考え、社会の中でたくましく生きていこうとする態度が育つ。

体験的な学習の活動例は広範囲にわたる。授業時数のことなどを考えると、各教科等の学習内容の中での位置づけを工夫したり、複数の教科等の学習内容を横断的・総合的に関連づけた取組を進めたりすることが大切である。その際、学習課程に即した活動になっているか、類似や重複してい

る活動はないかということを見直し、前に示した発達段階ごとの体験的な学習の意義を踏まえた系統的な取組を展開することが必要である。

#### < 子ども主体の場の設定 >

体験的な学習は、子どもが主体的に学習に取り組む能力を身につけることにおいて効果的な学習方法である。教科書に書いてある事実や法則を覚えたり、与えられた問題の答えを導いたりするのではなく、子ども自身が感覚機能を使って対象に働きかけ、新たな気づきや疑問をもったり、これからの学習に対する意欲を高めたりすることができるからである。そこで、指導者は、活動の目的や意義を絶えず意識し、この活動で子どもに何を気づかせたいのか、どのような力をつけたいのかということを考えて、体験的な学習を組み立てることが重要であると考え。

子ども主体で学習を進めるのだということを子どもが自覚するためには、活動の計画・準備を子どもたちが行うようにしたり、希望や考えに応じて選択できる場面を多く取り入れたりするなどの工夫をすることが必要になる。これは、生き方探究教育でつけたい力である、将来設計能力を育成することにもつながる。

活動の事前学習では、子ども一人一人に活動のめあてを明確にもたせることで、意欲をもって学習に臨むことができる。また、学校行事や見学、調べたことの発表会といった活動で終わるのではなく、活動の事後学習で、めあてに対する自己評価を行うことが必要である。今後の学習や生活場面で実践できるような機会を設けることも大切である。こうした事前学習から事後学習までの流れを、指導者だけでなく子ども自身が把握し、単元全体の見通しをもって体験的な学習に臨むことが大切である。子ども自らが課題をもち、自力で解決していこうとする主体性を育てることにつながるからである。

#### < 協同的な学びの場の設定 >

体験的な学習は、人や社会、自然とのかかわりの中で展開される。生き方探究教育における体験的な学習は、他者とのコミュニケーション能力や、規範意識などの社会性を育成していく上で効果的な取組であると考え。体験的な学習を通して、人とどのようにかかわっていけばよいのか、社会生活にどう参加すればよいのかということを経験することができるからである。

体験的な学習には、友だちと協力しながら活動する場面が多くある。友だちと活動の目的を共有することにより、力や知恵を合わせて課題を追究しようとしたり、話し合いをすることにより、自分と異なる考えを知り、多面的に考えようとしたりすることができる。また、体験的な学習を通して感じたことを共有し、成果や変容をお互いに認め合うこともできる。さらに、友だちと学ぶことの楽しさや協力することの大切さ、自分がしたことが他者や社会のために役に立っているといった役立ち感や役割分担における責任感など、一人学びでは得られなかったものを体感することも期待できる。

#### < 活動を言語化する場の設定 >

体験的な学習を「確かな学力」につなげるためには、多様な活動を行い、それらを言語化することが重要である。活動を話し言葉や書き言葉に置き換えることにより、自分の考えを整理したり、お互いの考えを発展させたりすることができるからである。

例えば、友だちとの協同作業の中で話し合いをすることにより、友だちの多様な考えに気づき、自分の考えを再構築することができる。また、活動を振り返る際に、論述したりレポートにまとめたりすることにより、思考が深まり、知識・技能の理解が深まる。さらに、まとめたものを友だちや下級生、家の人や地域の方々といった他者に発信することにより、活動の意味や価値について考えることもできる。

体験的な学習は、世代や立場の異なる様々な人の協力を得て進められることもある。そこで、こうした他者とのかかわりを通して、子どもたちの話す力や伝える力を育成することができる。お世話になった方々へのお礼状や発表会の招待状を書くという活動を取り入れることにより、表現力を育成することも期待できる。そのためには、体験的な学習と言語活動を相互に関連づけることが、確かな学力を身につける上で必要となる。

#### < 多様な評価をする場の設定 >

体験的な学習の評価は、活動の前後における、子どもの意識や言動、価値観の変容を把握して行うことが大切である。その際、各自が設定した目標に対する振り返りを行うといった、子ども自身による自己評価を取り入れることが必要である。自己評価能力を高めることは、生き方探究教育に

において、特に意識しなければならない、自己理解を深めて望ましい将来設計をしていくことにつながるからである。

ここで留意しなければならないのは、評価の観点を明らかにし、子どもと指導者が共有することである。子どもが、体験的な学習、あるいは学ぶことそのものに対する充実感・満足感を得られたか、指導者が、各教科等の学習のねらいに迫ることができたかということの両面から評価できるよう、評価の観点を工夫していく必要がある。

また、グループ内の子ども同士による相互評価や、保護者や地域の方などによる他者評価なども積極的に取り入れて行うことが大切である。自己評価のみでは信頼性や妥当性に欠けるため、多面的な評価を取り入れることにより、子どもの優れていた点や普段の学校生活では見ることのできなかった長所、言動の変容といったものを、多くの目で見取ることができる。

これらの評価結果は、子どもだけでなく、個人の連絡帳や学級通信などのおたより、広報誌などを活用して、家庭や地域に広く知らせていく工夫をすることも大切である。活動における成就感や満足感を得たり、人や社会とのつながりの中で、自分の役割を実感したりすることができるからである。また、これらの経験が、これからの学校生活や家庭生活、将来の社会生活への自信につながると期待できる。

以上のように、生き方探究教育を進める上で、人や社会とつながりを意識した「体験的な学習」を教育課程の中に効果的に組み入れ、学習計画を立案することが重要であることを述べてきた。子どもたち自身が、学ぶ意義や生きる意義を認識することができるよう、五つのポイントを踏まえ、授業改善をする必要があると考える。

## 第2節 体験的な学習を

有意義なものにするためには

### (1) 学習計画の中での工夫

体験的な学習は、主体的に学習に取り組む能力を身につけ、学ぶことの楽しさや成就感を体感することができる学習方法である。生き方探究教育を進めていく上でも、自分自身と他者とのかわり、生活や社会との関連に気づくことができるような体験的な学習を充実させていくことが、「なぜ学ぶのか。」「どのように生きていくのか。」といった、学ぶことや生きることの意義を認識すること

につながる。体験的な学習は、子ども一人一人が身につけた力をこれからの学習や生活に生かしたり、今の自分の在り方を見つめ、将来の生き方を考えたりする上で、大きな役割を果たすことが期待できる。

そこで、本研究では、第1章で示した、子どもの発達段階に応じてつけたい力であるキャリア発達課題や、生き方探究教育と既存の学習過程との学習内容関連表を基に授業を組み立て、相談活動や評価活動といった、個に対する働きかけを大切にしたい学習を展開していくことが、自己の夢をつくりあげる子どもを育成することにつながると考えた。

「働くこと」「生きること」に重点をおいた体験的な学習を組み入れた学習計画を立案し、昨年度と同様に、生き方探究教育で育てたい力である「夢をつくりあげる力（自己理解能力・将来設計能力）」に焦点を当て、各教科等における授業改善や、個に対する働きかけを大切にしたい授業実践を行うことにした。

以上のことを踏まえて、今年度の研究を構造的に示したものが、図2-1である。

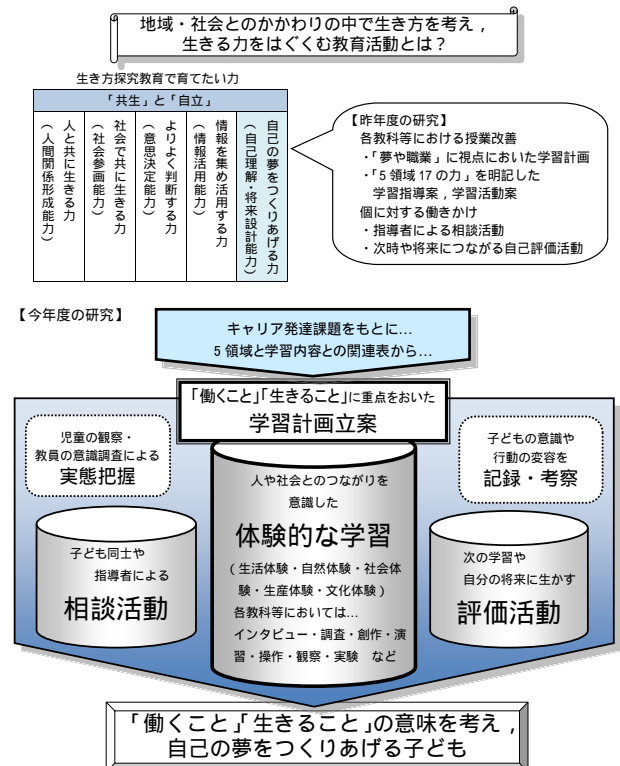


図2-1 研究の進め方

生き方探究教育を進める上で、体験的な学習を有意義なものにするためには、指導者がより意識して学習計画を組み立てることができるよう、学習指導案や学習活動案に工夫を加える必要があ

る。そこで、学習計画の中において、この体験的な学習のねらいは何なのか、どのような役割をもつのかということを確認にし、指導者の誰もが意識して指導ができるように、学習指導案や学習活動案上に、つきたい力と体験的な学習の事前・事後学習での指導ポイントや具体的な支援を明記する必要があると考えた。

表2-1は、第5学年総合的な学習の時間「ライフ(生命の誕生)」の学習指導案の中の、単元目標と学習計画の一部である。他教科との関連がわかるように、理科の学習内容を学習計画中に記載している。

表2-1 第5学年総合的な学習の時間の学習指導案 (単元目標・学習計画の一部)

**単元名** ライフ(生命の誕生)  
**目標** 自分の命がさまざまなつなぎの中で支えられ生きていくことに気づき、そのかけがえのない生命を大切に、これからも自己を尊重しながら強く生きていこうとする心情を育てる。  
**<生き方探究教育との関連>**  
 自史を家の人から聞き取り、人とのかけがえのない中で成長してきた自分を見つめる。  
**(自己理解能力)**  
 家の人の生き方や思いに直接触れ、感動し、共感していく。このことが家の人との絆を深めるとともに、かけがえのない自分を認識する。**(自己理解能力)**  
 自分の成長の様子や、今まで育ててくれた保護者の思いを改めて知ることにより、自らの生き方を考えるきっかけにする。**(将来設計能力)**

時	学習活動	支援	*留意点	評価	準備物
	「生命(いのち)ってどんなものだろう?」 「生命(いのち)」という言葉から連想することを書いてみる。(イメージマップ)	グループで相談活動を行うことにより、友だちのいるいるな考えを知ったり、イメージを膨らませたりする。 聴診器で心臓の鼓動を聴いてみることで、自分が生きていくことを確かめるようにする。		「いのち」をテーマに学習を進めていくことがわかり、単元の見通しをもつことができる。 将来設計能力	ワークシート 聴診器
理科 6H	「たんじょうのふしぎ」人のたんじょう 人が母体内でどのように成長していくのか調べ、生命のつながりについて考える。	*一人一人が計画に沿って調べられるように、図鑑や映像資料、模型を準備しておく。 *受精に至る過程は扱わない。		人は母体内で成長し生まれてくることを理解している。	
体験1	「My Life(自史:誕生編)」を作成しよう。 - 助産師や妊婦の方をゲストティーチャーに、「命の誕生」をテーマとする話を聞いたり、お母さん体験をしたりする。 <体験したいこと> 赤ちゃん人形をだっこ・妊婦擬似体験・乳幼児とのふれあいなど。 11年間の自史をどのような形でまとめるか考える。(例:絵本、年表、自叙伝、アルバム...)	話を聞き、体験することを通して、誕生時の親の思いや命の大切さとともに、命の誕生に携わる方の仕事に対する思いを知る。 <話していただきたいこと> 体験談・エピソード・仕事の内容・仕事に対する思いなど。		赤ちゃん人形 妊婦擬似体験セット 誕生時の乳児の様子や親の思い、命の大切さについて知ろうとする。 自己理解能力	赤ちゃん人形 妊婦擬似体験セット
取材1	目次、作成計画、情報収集の方法などを考える。 *誕生したときの様子、小さい頃の様子についての情報を家の人から聞き取り、資料を集めたりする。 集めた情報を自分なりにまとめる。	形式記や記入例をモデルとして示すことにより、自史のイメージをもつことができるようにする。 母子手帳などを参考に資料を集めることにより、理科で学習したことと自分の誕生したときの様子を重ねて考えることができるようにする。 *事前に学校通信などで、資料集めや聞き取りの協力が得られるように、保護者に働きかける。		自史をどのような形でまとめることができるか。 意思決定能力 自史を作るための方法がわかる。 将来設計能力 計画に従って取材活動をし、自分を見つめることができる。 情報活用能力	

まず、単元目標の下に、生き方探究教育を進める上で大切にしたいことを5領域とともに示した。また、時間ごとの評価の下には、5領域の中でその時間に重点的に意識して育てたい力を、ゴシック体に網掛けをして明記した。この工夫により、指導者は、生き方探究教育で育てたい力を、いつ、どの学習活動で意識して指導すればよいのかがひとめでわかるようになる。また、単元全体を見渡

したとき、五つの領域がバランスよく指導できているかなどの確認をすることができる。

次に、他教科等との関連がわかるように、単元の学習計画の中に、理科「たんじょうのふしぎ」の学習内容を記載した。教科で習得した知識を、総合的な学習の時間に活用することにより、生命の誕生の仕組みや胎児の成長の様子を自分のこととしてとらえ、もっと調べてみたいという関心・意欲が高まり、自分自身の成長を見つめ直すきっかけになると考えたからである。

さらに、体験的な学習における活動内容例と、ゲストティーチャーが話す内容例を学習指導案上に吹き出しの形で明記した。これは、指導者が、体験的な学習において留意すべきポイントを意識することができることも、事前にゲストティーチャーに依頼をする際、明確に伝えることができるからである。

表2-2は、同単元の本時の目標と展開を示したものである。

表2-2 第5学年総合的な学習の時間の学習指導案 (本時の目標・展開)

<本時の目標>  
 出産したばかりのお母さんに出産時や育児のお話を聞いたり、お母さん体験をしたりすることを通して、生命の誕生について考えることができる。  
 <本時の展開(127時間)>  
 \*ゴシック部分は、関連する「5領域17の力」の番号と、生き方探究教育を進める上で大切にしたい支援の視点を示す。  
 \*相談活動とは、指導者や子ども同士による個別の言葉かけ、活動での支援をさす。

学習活動	○支援	*留意点	相談活動	評価	※準備物
<事前学習(2時間目)のポイント> ○次時の体験的な学習について知る。 ・ゲストティーチャーの紹介を聞き、体験活動の内容について知る。 ○各自が次時の活動のめあてをもつ。 ・生まれたばかりの赤ちゃんの大きさや様子についてくわしく知る。 ○ゲストティーチャーへの質問事項を考える。 ・赤ちゃんがお腹にいたときに気が付いたことは何か? ・お母さんになつたときの気持ちは?	○(5-⑩)事前に次時の活動内容について知ることにより、見通しをもつことができるようにする。 ○(5-⑩)めあてをもつたり、質問を考えて知りたことをはっきりさせたことにより、主体的に学習に取り組むことができるようにする。 ○(5-⑩)めあてや質問を考えた児童には、知りたことが生まれる前のことなのか、後のことなのかを選択させ、「知っていることと知らないことは何か」という言葉かけをすることにより、自分の課題を明らかにできるようにする。				
○体験的な学習を通して、いのちの誕生について考えよう。					※フラッシュカード
○自分のめあてを確認する。 ・お腹に赤ちゃんがいるお母さんの様子について知る。 ○体験活動をする。 1) 妊婦さんのお話(全体で) 2) お母さん体験(グループで) (妊婦擬似セットの体験・赤ちゃん人形をだっこ・乳児とのふれあい)	○(5-⑩)自分の本時のめあてを立てることにより、意欲的に学習に取り組めるようにする。 ○(2-⑥)のお話を聞き、体験することを通して、誕生時の親の思いや命のつながり、大切さを実感することができるようにする。 *事前に、話していただきたいこと(産前・産後の体験談、そのときの心情、家族の様子や時間などの打ち合わせをゲストティーチャーとしてお。 *乳児とのふれあいは、安全な広い場所で行うようにする。 ○グループでお母さん体験を行い、友達同士で優しい接し方や言葉かけをすることにより、友達の様子を見つめられるようにする。また、友達との言葉かけを通して、自分のよさを認識できるようにする。 ○友だちの多様な感想を聞くことにより、自分の考えと比較したり、思いを広げたり深めたりすることができるようにする。				※振り返りカード ※妊婦擬似セット ※赤ちゃん人形 誕生時の乳児の様子や親の思い、命の大切さを知る。(行動観察・発言ノート)
○感想を交流する。 ・理科で学習したときは、生まれたばかりの赤ちゃんは小さいかと思っていたけれど、実際にだっこしてみると、重く感じられた。 ・妊婦さんの体の変化や苦労がわかった気がする。 ○今日の学習を振り返る。 ・命はかけがえのないものだということに気がついた。これからは命を大切にしたい。 ・子どもは家族のみんなから祝福されて生まれてきたことがわかった。自分の赤ちゃんのときの様子をもっとくわしく知りたかった。	○(5-⑩)振り返りカードに、本時のめあてに対する自己評価と、次時や将来につながる思いや課題を書き留めることにより、体験での学びを生活に生かしていくことができるようにする。 ○自分の場合はどうだったのか比較するなど、自分のこととして考えるように言葉かけをすることにより、自分のことをもっと詳しく知り、自史を作成したいという思いを高めることができるようにする。				※振り返りカード
<事後学習(3時間目)のポイント> ○これからの活動や生活に生かす。 ・11年間の自史を作った。 ・自分自身はどうだったのかを確かめるために、家の人から聞いた、アルバムなどを見たりして調べてみよう。	○(5-⑩)記入形式を選択することにより、主体的に自史を作成することができるようにする。 ○(5-⑩)目次や作成計画を立てることにより、見通しをもつて、自史を作成することができるようにする。				



ここでも、本時の展開の支援の欄の中に、生き方探究教育を進める上で大切にしたい視点を、“5領域17の力”の番号とともにゴシック体で明記した。各教科等で行う支援を、生き方探究教育でつきたい力と照らし合わせてみると、重複箇所や類似点が見えてくる。このようにゴシック体で明記することにより、本時の展開の中でも生き方探究教育でつきたい力を意識して、指導や支援を行うことができる考えた。

また、支援の欄内に、相談活動による支援を「**相**」で明記した。相談活動とは、一人一人の子どもに応じた、指導者や子ども同士による聞き取りや言葉かけなどのことを示している。

昨年度は、指導者による相談活動を意図的に組み込んだ実践を進めてきた。子どもが考えたり、選択・決定したりする場面で、指導者が、子どもの自己の在り方や生き方に迫る聞き取りをしたり、存在価値を認め、学習意欲を高めるような言葉かけをしたりすることにより、学習に消極的だった子どもや自分に自信がなかった子どもの言動が変容する姿を見ることができた。

そこで、今年度は、指導者による相談活動だけでなく、協同的な学び合いの中で子ども同士の相談活動の場を設定し、言葉かけなどによりお互いに高め合って学びを深めていく学習形態を築くことが大切であると考えた。

次に、本時の評価については、別の評価項目を新たに設定するのではなく、各教科等の評価項目と生き方探究教育でつきたい力とを矢印でつなぎ、関連がわかるように工夫した。各教科等の学習でねらいが達成できたかを評価することは、生き方探究教育でつきたい力をはぐくむことと重なる部分が多い。このような工夫をすることにより、生き方探究教育でつきたい力を意識した評価活動を行うことができる考えた。

さらに、本時の学習の前後の部分に、事前学習と事後学習のポイントを記載した。体験的な学習における指導の留意点を具体的に示すことにより、事前学習では、本時の活動のめあてを子ども一人一人が明確にもつことの大切さや、意欲をもって主体的に取り組むことができるような手だてを指導者は意識することができる考えたからである。同様に、事後学習では、活動の振り返りをし、それを、今後の学習や生活でどのように生かすのかということを具体的に示した。

相談活動と評価活動の具体例については、次項で詳しく述べることにする。

## (2) 個に対する働きかけの工夫

<概要編>は、生き方探究教育の概念について、「児童生徒個々の特性に応じたキャリアの形成を支援し、『生きる力』を育みながら、社会との関わりの中でいかにその力を役立てるのかという、いわば生き方の確立に向けた教育」(29)と示している。つまり、体験的な学習においても、子どもたちが自己の在り方や生き方を考えて将来を設計していくことができるよう、子ども一人一人に応じた支援をしていくことが必要となる。そこで、次の二点を重視し、工夫することにした。

一点目は「相談活動」の工夫である。生き方探究教育を進めるに当たり、子どもが自己理解を深めるためには、友だちとの交流や指導者との対話などを通して、子ども自身が自分のありのままの姿を受け入れ、自分のことを肯定的にとらえることができるようにすることが大切である。また、よりよい将来設計ができるように、今学んだことをこれからの学習や生活、将来の生き方につなげていくようにすることが大切である。これらを喚起することができる言葉かけや聞き取り、一言メッセージの記入といった働きかけを、子ども一人一人に応じて行うことが重要である。

そこで、昨年度の実践の成果を踏まえ、指導者による指導や支援を行うとともに、子ども同士による相談活動の場を設定し、アドバイスや励ましの言葉かけといった働きかけを行うようにした。

下に示したものは、相談活動の場で行う、指導者や子ども同士による言葉かけの例である。

### 〔共感・受容の言葉かけの例〕

- ・なるほど。～～というのは、いい考えだね。
- ・すごいね。～～のことをよく知っているね。
- ・いいね。～～ができる(できた)んだね。
- ・きっと、君なら～～ができると思うよ。
- ・大丈夫。できることからやってみよう。
- ・自分のやり方でいいんだよ。

### 〔問いかけの例〕

- ・～～をしてみて、どう思ったのかな？
- ・～～を終えて、何が大切だと感じたのかな？
- ・次は、何をしてみたい？
- ・将来( 年後, 才のとき)の君は、何をしているだろう？
- ・どんな人(自分)になりたいの？
- ・夢(やりたいこと)をかなえるために、今、何を？(しなければならぬのかな？)

ここで留意したいことは、「～～」の部分でできるだけ具体的に伝えるということである。また、

指導やアドバイスを行う際には、結果や良さを十分に認めた上で、個に応じた働きかけをすることが重要である。

さらに、相談活動の経過を記録しておくことも大切である。子どもの変容を記録することは、子ども理解や評価に役立つだけでなく、指導や支援の成果と課題を把握することができ、次時の活動に生かすことができると考えるからである。

二点目は、「評価活動」の工夫である。生き方探究教育では、子どもが今の自分の姿や能力を的確に把握し、これから先の自分の姿を思い描いて目標を設定する力が必要になってくると考える。つまり、常に振り返りを行い、自分の在り方を見つめ、自己評価と自己改善を繰り返し行うことが大切である。

そこで、振り返りカードを活用し、授業の初めに、教科等の学習のねらいを基にした自分のめあてを立て、授業の終わりに、そのめあてに対する自己評価を行う。学習時間の満足度・達成度を3段階で評価し、「思ったこと・これからがんばりたいこと」などの一言感想を文章で書くのである。この欄に書いた成果や課題が、次時の学習のめあてを立てるときに役立つと考える。教科等の学習の中で学んだことを、他の教科等や生活・将来に生かそうとするきっかけになるといったことも期待できる。

また、前節でも述べたが、評価の目的や規準を明らかにし、子どもと指導者が共通理解しておくことが大切である。適切な評価の仕方を示すことも、自己評価能力を高める上で有効だと考える。さらに、多様な評価活動を取り入れ、子どもが自己理解を深めたり、指導者が多面的にその子を見取ったりすることも大切である。

以上のような工夫を取り入れながら、体験的な学習を組み入れた授業改善を行った。第3章では、第2学年・第3学年・第5学年の実践授業の様子を報告する。

(22)文部科学省『教育課程審議会答申』 1976.12

(23)文部科学省『教育課程審議会答申』 1987.12

(24)文部科学省『小学校学習指導要領』 1999.3

(25)前掲(5)

(26)文部科学省『中央教育審議会答申』 2008.1

(27)国立教育政策研究所生徒指導研究センター『キャリア教育体験活動事例集(第1分冊)-家庭や地域との連携・協力-』  
2009.3 p.5

(28)前掲(27) p.7

(29)前掲(10) p.2

### 第3章 小学校生き方探究教育の実践

生き方探究教育を充実させるためには、自分自身と他者とのかかわり、生活や社会との関連に気づくことができるような体験的な学習を、各教科等の教育活動の中に効果的に組み入れていくことが大切である。こうした教育活動の積み重ねが、「なぜ学ぶのか。」「どのように生きていくのか。」といった、学ぶことや生きることの意義を認識することにつながると考えるからである。

そこで、子どもの実態を把握した上で、発達段階に応じたキャリア発達課題を基に学習計画を立案し、組み入れた体験的な学習のねらいは何なのか、どのような役割をもつのかということを確認にして、実践授業を行うことにした。本章では、第2学年・第3学年・第5学年のそれぞれの実践授業で工夫したことと、子どもたちの姿について報告する。

#### 第1節 第2学年「生活科」

##### ～イベント企画体験～

(1)人とのつながりを意識した取組の工夫  
生活科『みんなでつくろうフェスティバル』(全15時間)の単元目標は、以下のとおりである。

今までの活動でお世話になった方々を招待して、みんなでフェスティバルを楽しもうとしている。  
楽しいフェスティバルにするために、今まで体験してきたさまざまな力を応用し、友達と協力しながら工夫してフェスティバルを作ることができる。  
お世話になった方々や仲良くなった人たちを招待してフェスティバルを開き、みんなで楽しむことのすばらしさや友達と協力し合うことよさに気づく。  
(30)

本単元は、身近な人や今までの生活科の学習でお世話になった人を招待して、みんなでフェスティバルを作り上げ、楽しむことをねらいとしている学習である。これまで、子どもたちは、学校や地域で自分と身近な人々や自然とかかわりながら、様々なことを感じ取り、考え、気づき、それら表現する活動を積み重ねてきた。こうした活動を通して学んだことや身につけた力を応用し、自分たちでフェスティバルを作り上げていく学習にしたいという指導者の願いを踏まえ、学習計画を立てることにした。

〔生き方探究教育との関連〕

単元計画については、小学校生活科の指導計画(31)を活用した。図3-1は、本単元の学習計画と、生き方探究教育で育てたい“5領域17の力”の関連を示したものである。

～第2学年 生活科「みんなでつくろう フェスティバル」～

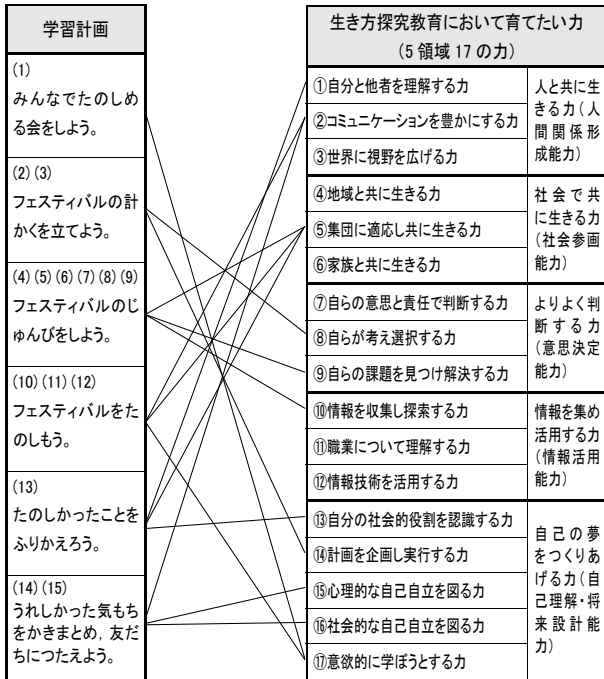


図3-1 本単元の学習計画と“5領域17の力”との関連

勤労観の基礎形成の時期である小学校における、低学年時期のキャリア発達の目標は、「自分の役割に興味をもつ」(32)である。そこで、本単元では、みんなで楽しいフェスティバルを作り上げていく活動を通して、いろいろな役割があることを知り、子どもたち一人一人が、進んで計画・準備をすることができるようにしたいと考えた。このことが、生き方探究教育でつきたい力である、将来設計能力をはぐくむことにつながると考えたからである。

また、フェスティバルを開催する活動を通して、友だちの良さや自分の可能性、友だちと協力することの大切さや楽しさなどに気づくことができるようにしたいと考えた。このことが、友だちと力を合わせて一つのことをやり遂げ、成就感や達成感を味わうといった、人間関係形成能力や自己理解能力をはぐくむことにつながると考えたからである。

このように、友だちとの協同学習や、下級生・地域の方を招待する活動の中で、“人とのつながり”を意識することができるよう、実践授業を進めた。

〔体験的な学習における工夫〕

昨年、1年生だった子どもたちは、2年生にフェスティバルに招待してもらい、楽しかったという思いと同時に、「自分たちも2年生になったら1年生を招待して、楽しい会をしてみたい。」という感想を抱いたと思われる。また、フェスティバルの様子についてもイメージができています。

そこで、やってみたい内容や方法が同じ友だちとグループを作り、計画からフェスティバルの実施までの見通しをもった活動計画を自分たちで立て、実行していくことにした。活動の見通しをもつことで、最後まで意欲をもち、主体的に体験的な協同学習を進めることができると考えた。そのため、単元の学習計画の流れを教室に掲示したり、グループごとの活動計画をカレンダーに書き示したりして、今、何をしなければならないのか、次の活動で何をするのかといったことを、子ども自身が把握できるように工夫した。

また、一人一人が役割を担うことにより、最後までやり遂げようという責任感や、自分は誰かの役に立っているのだという自己有用感をもち、体験的な活動に取り組むことができると考えた。そこで、全員に“リーダー”という役割を与えることで、どの子ども自分の役割を実感することができる場を設定するという工夫を加えた。

さらに、グループで相談してものごとを決め、活動するといった時間を確保することにより、子どもが自己決定したり、お互いの良さや課題を相互評価したりする場を設定することができると考えた。そのため、授業の最後にグループごとの“ふりかえり会議”の時間を設け、それぞれの思いを十分に出し合ったり、活動計画の追加・修正を行ったりすることができるように工夫した。この場での振り返りは、各自が振り返りカードに記録しておき、次の時間の目標設定に役立てることができるようにも工夫した。

(2) 子どもの姿から

〔フェスティバルの計画を立てる様子(2～3/15H)〕

まず、指導者は、学習計画を子どもたちと一緒に立案するために、「フェスティバルを開くために、今から本番までに何をすればよいでしょう。」という問いを投げかけた。子どもたちは、フェスティバルに招待された昨年の経験を思い出しながら、「誰が何のコーナーをするかを定める。」「ゲームや景品を作る。」「準備するものを集める。」「招待状も作りたい。」など、本番前にしておかなければ

ばならないことを挙げた。そこで、子どもたちの発言を指導者が中心となって整理し、「計画を立てる段階で話し合う」活動と「実際にコーナーに分かれて準備する」活動を単元計画に位置づけることを全体の場で確認した。

立案した本単元の学習の流れは、教室に掲示し、子どもたち自身が単元全体の活動の見通しをもつことができるようにした。図3-2は、黒板に掲示した単元構想図である。学習した日や活動内容、子どもの思いなどを書き加えることにより、学習の経緯や進度がわかり、前時にしたことを振り返る場面でも活用することができた。

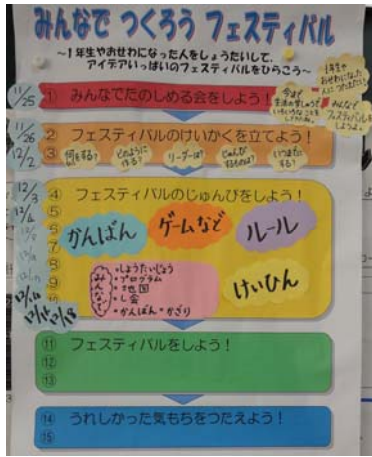


図3-2 掲示した単元構想図

次に、子どもたちは、やってみたい内容や方法を自分の意思で選び、18のコーナー（各クラス9コーナー）に分かれ、4~6人のメンバーで計画を立てるための話し合いを行った。そして、効率よく準備が進められるようにグループ内で役割を分担し、仕事の進み具合の確認をする役目を担うリーダーを決めた。以下に示したものは、子どもたちが考えたリーダーである。

- ・ゲームリーダー
- ・クイズリーダー
- ・ルールせつめいリーダー
- ・かいぎリーダー
- ・けいひんリーダー
- ・かんぱんリーダー
- など

リーダーを決めて役割を明確にすることにより、一部の子どもに仕事の負担が偏ることなく、効率よく作業が進んだ。また、リーダーがゲームの出来具合を点検したり、景品の数量を確認したりすることを通して、責任をもって最後まで役割を果たそうとする姿を見ることができた。

さらに、見通しをもって準備が進められるように、各コーナーで“活動計画カレンダー”を作成した。右上の図3-3は、相談しながら準備期間の予定を記入した、あるグループの“活動計画カレンダー”である。「材料集め」「ゲーム作り」「ルールや看板作り」「景品作り」「リハーサル」など、準備する内容をカレンダー上に記入することにより、いつまでに何をしなければならぬのかとい

うことがひとめでわかり、子どもたちが主体的に活動することができた。また、このカレンダーを見ながら、毎時間、ふりかえり会議を行い、子どもたち自身が、随時、計画の修正や追加をした。計画を立て、見通しをもって活動していこうとする姿が見られた。

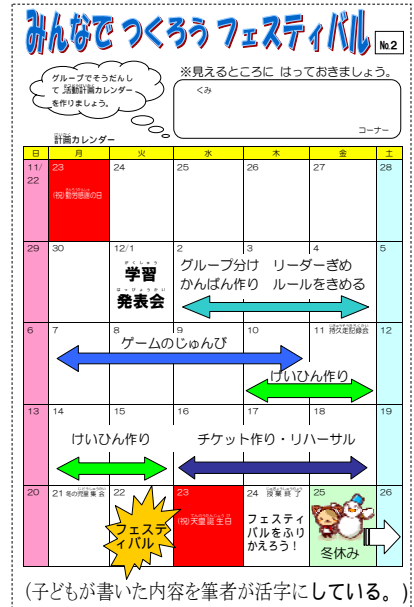


図3-3 活動計画カレンダー

〔グループでの“ふりかえり会議”の様子(4~9/15H)〕  
各コーナーの準備を行う ~ /15時間は、次のような流れで学習を進めた。

1. 学習前の気持ちを伝え合う
2. 今日の学習でやることの確認
3. 自分のめあてを立てる
4. グループ活動（各コーナーの準備）
5. みんなで“ふりかえりかいぎ”
6. ひとりで“ふりかえりタイム”
7. 振り返りの全体交流

グループ活動の後には、毎時間、“ふりかえり会議”の時間を5分間設け、「がんばったことやうまくできたこと」「次の時間(まで)にやることや、やりたいなと思うこと」の二つの観点で話し合いを行った。図3-4は、あるグループの“ふりかえり会議”の様子である。



図3-4 ふりかえり会議の様子

“会議リーダー”が司会進行し、問題点があれば、担当のリーダーが中心となって再確認したり解決策のアイデアを出し合ったりした。ここでの話し合いを通して、不安に思うことや問題点を自分たちの力で解決していこうという姿を見ることができた。また、作業の進捗の確認だけでなく、自分のがんばりや、友だちの活動や言葉かけの良さを交流することができ、お互いを認め合うことの大切さを実感できたと思われる。

〔フェスティバル本番の様子(10～12/15H)〕

フェスティバルの本番は、1年生と、稲作や野菜づくりの学習でお世話になった地域の方や教職員を招待して開催した。図3-5は、地域の方と一緒にゲームを楽しんでいる“やさしいクイズコーナー”の様子である。



図3-5 フェスティバル本番の様子

コーナーのお店当番は15分間の3交代制とした。「いらっしやいませ。」「さん、ぼくのお店に来てください。」と大きな声で宣伝活動をしたり、1年生にルールを優しく説明したりする姿を見ることができた。

当番ではない時間には、客として他のコーナーを回ることができるようにした。生活科で今までに学習した内容をゲームやクイズにしているので、「これ、覚えている。」「あれ、どうだったっけ。」などと言いながら学習を振り返り、楽しんでいる様子が見られた。また、「このクイズの出し方、おもしろいなあ。」「このコーナーの景品は、ていねいに作ってあるね。」など、他のコーナーの工夫や友だちのがんばる姿を知ることができた。お店当番と客の両方の役割を体験することにより、役割を果たす友だちの様子を実際に見ることができ、良さを発見することができたようである。

〔フェスティバルの感想を伝え合う様子(14～15/15H)〕

事後学習では、準備期間やフェスティバル当日の自分たちのコーナーの様子や思いをワークシートに書きまとめ、友だちと伝え合う活動を行った。図3-6は、生活班の友だちと感想を伝え合う活動の様子である。



図3-6 生活班で感想を伝え合う様子

生活班の友だちの感想を聞き合うことで、コーナーのメンバー以外の友だちの様子や思いを交流することができた。

感想の中には、「ゲームや景品を作るのは大変だったけど、1年生が喜んでくれたから、がんばって準備をしてよかった。」「カレンダーの計画通りにはいかなかったけど、みんなと力を合わせて最

後までがんばることができた。」という内容があり、見通しをもち、計画を立てることや、役割を果たすことの大切さを実感できたようである。

また、「友だちが『がんばろう。』って言ってくれたから、仕事をがんばれた。みんなが手伝ってくれたから、本番は成功したんだと思う。」「1年生に話しかけるのは少し緊張したけど、順番をゆずってあげたりやり方を教えてあげたりしたら、とても嬉しそうだった。もっと1年生と仲よくなりたい。」という内容からは、友だちや下級生とのかわりを豊かにすることの大切さを実感している様子うかがえる。

「本番はすごく忙しかったけど、みんながお店に来て、笑顔になってくれたから楽しかった。」「お客さんの1年生や校長先生たちに、『ありがとう。』といっぱい言われて、うれしかった。」という内容には、自分たちの力でフェスティバルを開催し、やり遂げたのだという満足感や達成感が表れている。

さらに、「また、フェスティバルを計画して、誰かを招待したい。」「今度は近所の友だちとパーティーをやってみたい。どんなパーティーにするかを考えるのが楽しみです。」という感想からは、この学習で経験したことをこれからの生活に生かしていこうとする姿うかがえる。

〔相談活動や評価活動での子どもの変容〕

前述したように、毎時間、グループ活動の後に“ふりかえり会議”を設け、子ども同士による相談活動を行った。以下に示したものは、あるグループの、“ふりかえり会議”における相談活動の様子である。(T…指導者)

- A児：ゲームの準備がしっかりできました。リハーサルはD君が手伝ってくれました。
- B児：景品の数が足りないかなと思っていたけど、今日、みんなで協力してたくさん作れたから、よかったです。
- C児：次の時間にやらないといけないうことや、やりたいことはありますか？
- D児：本番は、誰がゲームのルール説明をする？ みんなでするより、誰がどんな仕事をするかを決めた方がいいと思うけど。
- T：なるほど。それはいい考えですね。本番では、他にどんな仕事が必要か、考えてみたらどうですか？
- E児：ゲームする人や受付をする人も、次の時間までに決めた方がいいな。計画カレンダーにつけ足しておこう。

A児とB児は、自分のがんばりだけでなく、友だちの協力によって準備がうまくできたという感想を述べた。D児は、「D君が手伝ってくれた。」というA児の言葉を聞き、とても嬉しそうな表情を浮かべた。A児の役に立ったのだという満足感を得ることができたと思われる。また、D児が不安に思うことを発言し、E児が新しいアイデアを出したことにより、次時にやるべきことが明確になり、活動意欲が高まったと思われる。

評価活動として、第2学年では、グループでの“ふりかえり会議”の後、学習の初めに立てた自分のめあてに対する自己評価を行い、それを毎時間、振り返りカードに記入した。図3-7は、子どもが記入した振り返りカードの一部である。

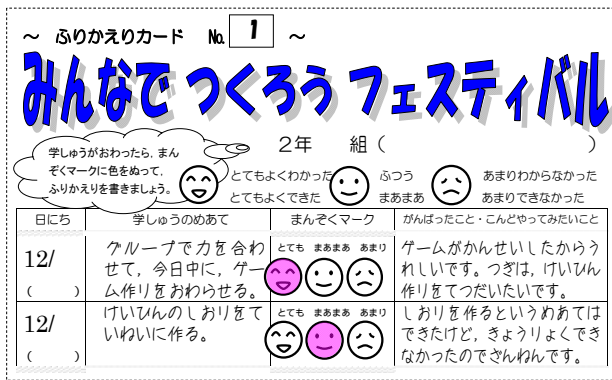


図3-7 振り返りカード(第2学年生活科)の一部

学習の最初には、生活科のねらいを基にした自分の学習のめあてを立てる際に活用した。本時で何の活動をどのようにがんばるのかという目標を、できるだけ具体的に記入させるようにした。

学習の最後には、自己評価として、学習時間の満足感や達成度を3段階で評価し、「がんばったこと」や「こんどやってみたいこと」などの一言感想を1~2文で書いた。この欄に書いた成果や課題を、次時の学習のめあてを立てるときの参考にし、活用している児童もいた。

図3-8は、“ひとりでふりかえりタイム”の時間に、振り返りカードに自己評価を記入している様子である。



図3-8 自己評価活動の様子

単元の初めころは、自分の立てた学習のめあてに対して、「看板作りをがんばった。」「ゲーム作りができなかった。」のように、結果の記入だけで終わることが多かった。

そこで、指導者が、「前の時間と比べて、何を、

どんなふうにごんぱりしましたか。」という、自分の行動や思いの変容を見つめ直させることができるような言葉かけを行った。その結果、「みんなと仕事を分担して、前の日よりも、ゲームの箱作りをがんばった。」といった人とかかわりや自分の成長を意識した感想が書けるようになった。

また、「今日やり残したことや、次の時間にやりたいと思うことは何ですか。」という言葉かけにより、「景品の数がまだ足りないので、次の時間はたくさん作って、1年生を喜ばせたい。」といった、次時の活動意欲につながる振り返りができるようになった。

さらに、各自の振り返りをクラス全体で交流することにより、一人一人の自己評価能力を高めるだけでなく、「コーナーの工夫はすごいな。」「いいアイデアだなあ。」といった、子ども同士の相互評価に発展させることができた。

## 第2節 第3学年「社会科」

～販売体験・買い物体験～

- (1) 社会とのつながりを意識した取組の工夫  
社会科『わたしたちの暮らしとはたらく人びと』  
- 1. 商店のはたらき - (全15時間)の単元目標は、以下のとおりである。

身近な地域で人々が販売に関する仕事をしていることに興味をもち、その仕事わたしたちの生活を支えていることがわかるようにする。身近な地域の販売活動の様子について見学・調査したり、表現したりすることを通して、仕事の特色や仕事に携わる人々の工夫、自分たちの生活とのかかわり、他地域との関連を具体的に考えるようにする。(33)

本単元は、自分たちの消費生活に関心をもち、スーパーマーケットや商店街などの見学、調査を通して、店の特徴や働く人々の工夫について理解させることをねらいとしている。また、それらの仕事は、自分たちの生活を支えていることや、他の地域ともかかわりがあることに気づかせる学習である。「買い物調べを通して、学習課題を見つける。」「自分なりの問題意識をもってインタビューや見学などを行い、課題を追究する。」「追究してわかったことをまとめ、交流する。」「交流する中で新たな課題を発見する。」といった問題解決学習を進め、主体的な学び方の基礎を身につけることができるようにしたいという指導者の願いを踏まえ、学習計画を立てることにした。

〔生き方探究教育との関連〕

単元計画については、小学校社会科の指導計画(34)を活用した。図3-9は、本単元の学習計画と、生き方探究教育で育てたい“5領域17の力”の関連を示したものである。

～第3学年 社会科「商店のはたらき」～



図3-9 本単元の学習計画と“5領域17の力”との関連

中学年時期のキャリア発達の目標は、「自分の役割に責任をもつ・身近な地域に様々な仕事があることを知る」(35)である。そこで、本単元では、学習課題を追究するためのお店でのインタビューや調査・見学を通して、販売に携わる人々の苦労や努力、やりがいを理解することができるようにしたいと考えた。このことが、働くということを考えるきっかけとなり、将来設計能力をはぐくむことにつながると考えたからである。

また、販売体験活動を通して、自分たちが住む地域には、自分たちの生活を支えている様々な仕事があることを知るとともに、自分がやるべき仕事を、責任をもって行うということの大切さを実感することができるようにしたいと考えた。このことが、社会参画能力や、自分の長所や可能性に気づくといった自己理解能力をはぐくむことにつながると考えたからである。

このように、消費生活の調査・見学や地域での職場体験などを通して、“社会とのつながり”を意識することができるよう、実践授業を進めた。

〔体験的な学習における工夫〕

単元の最初に、消費生活に目を向け、学習課題を見つけるために、各家庭で買い物調べを行うことにした。その際、どこで何を買ったのかを調べるだけでなく、店選びや商品選びのポイントは何かということ、家の人から聞き取り、記録するようにした。このことにより、調査活動が単元の学習の動機づけとなり、クラス全体の学習問題を追究するとき、子ども一人一人が調査を基に予想を立てることができると考えたからである。そこで、消費者はどのような願いをもって買い物をしているのかという調査結果をクラス全体で交流して、自分なりの学習問題を作ることができるように工夫した。

また、自分で作った学習問題を追究するため、地域のスーパーマーケットに見学に行き、その後には、商店で子どもたちが販売体験を行うことにした。店の見学だけでなく、実際に大人と一緒に働くという体験をすることにより、店の特徴や販売する人々の工夫、苦労、やりがいなどについて、より深く実感することができると考えたからである。どの商店で仕事をするかは、自分の意思で選択・決定するようにした。お世話になるお店の人のかかわりが、体験当日だけで終わることのないように、事前に体験活動の依頼を指導者と一緒に行ったり、活動後のお礼の手紙をもって感謝の気持ちを伝えに行ったりするといった工夫も行うようにした。

さらに、買い物体験を行うことにより、消費者の立場から買い物の仕方や工夫について考えることができると考えた。そこで、買い物の仕方や工夫について考えた後、事前に、買うものについて家の人と相談・計画をし、商店街で買い物をする実践の場を設定することにした。このことにより、販売者と消費者の双方の立場や願いについて理解することができ、自分たちの生活と、社会の様々な仕事とのつながりについて考えるきっかけになると考えたからである。

(2) 子どもの姿から

〔スーパーマーケット見学の様子(5～6/15H)〕

事前学習では、「Mスーパーに買い物客がたくさん集まるのはなぜなのかをさぐるために、見学に行こう。」という見学の目的を明確に示した。また、学級全体の学習問題を基に自分が特に調べたいことを絞り、自分の経験や家族からの聞き取りを基に予想を立て、主体的に見学活動ができるよ

うにした。また、見学時にとるメモの書き方やインタビューの仕方について、国語科と関連づけて復習し、見学のときに活用することができるようにした。以下に示したものは、子どもたちが考えた学習問題と予想の一部である。

商品は、どのように売られているのだろう。  
ねだんの安いものや、新しいものをたくさん売っていると思う。  
お客さんにどのようなサービスをしているのだろう。安売りをしたり、試食コーナーを作ったり、チラシを配ったりしていると思う。  
スーパーで働く人は、どのような仕事をしているのだろう。レジで計算、お客さんの呼び込み、商品並べなどをしていると思う。

見学の当日は、Mスーパーの売り場や倉庫、調理室などの見学をし、説明を聞いた後、特に調べたいことについて再度見学したり、働いている人に質問したりして、自分の学習問題を解決していった。



図3-10 Mスーパーでの見学活動

図3-10は、Mスーパーでの見学活動の様子である。見学の視点

を明らかにし、予想を確かめながら問題解決することで、どの子も意欲的に見学活動ができた。また、その他にも工夫点がないか、調べようとする姿を見ることができた。

事後学習では、見学してわかったことを自分なりにまとめ、友だちに伝えるという活動を行った。

ここでは、画用紙でのまとめ方を図3-11のように例示するとともに、新聞やパンフレット、紙芝居など、まとめる際の表現方法のモデ

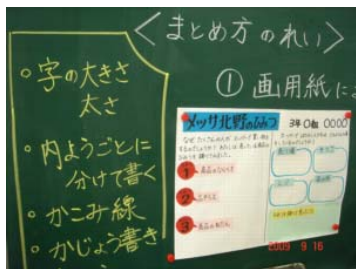


図3-11 画用紙でのまとめ方を例示

ルを提示した。そして、自分が調べてわかったことを表現するのにふさわしい方法を考え、自分で選択できるようにした。子どもたちは、「絵をたくさん入れるとわかりやすいから紙芝居にしよう。」「みんなが知らないようなことをたくさん伝えたいから、新聞にしよう。」などの理由をはっきりさせて、表現方法を選択・決定することができた。

この後、一人一人がまとめた作品を基に、スー

パーマーケットでの見学を通してわかったことを交流し、学級全体の学習問題を解決するために話し合いを行った。見学活動からわかったことを文字や図表にかき表し、友だちと伝え合うことにより、自分の考えが確かなものになった。また、新たな発見ができたり、学習問題を多面的に解決したりすることにつながったと考える。

〔商店街での販売体験の様子(12~13/15H)〕

事前学習では、「商店での販売の工夫について調べ、働くことについて考えよう。」という体験の目的を明確に示した。また、販売体験をする商店を選択する際、その店で働きたいと思った理由をもたせるようにした。理由をもって、自分で商店を選んだことにより、「責任をもって、しっかりと働こう。」という気持ちを高めることにつながった。さらに、たくさんの買い物客に来てもらうためにがんばることを、一人一人がめあてとしてもち、販売体験を行うことにした。以下に示したものは、販売体験を行う際のめあての一部である。

えがおで、「いらっしゃいませ。」とお客さんに言うようにする。  
お店の人が言うことをよく聞いて、しっかり仕事をする。  
商品のせいりせいとんをがんばる。

活動の当日は、二日間で、のべ29店舗の協力を得て、販売体験を実施した。各商店では、2~3名(スーパーマーケットでは7名)の子どもたちが約

1時間、商品の販売の手伝いや接客、商品の棚卸しや整理整頓、宣伝の準備などを行った。図3-12は、和菓子屋で販



図3-12 和菓子屋での販売体験

売体験をしている様子である。

「ケーキが大好きだし、大きくなったらケーキ屋さんになりたい。」と話していたA児は、ケーキ屋で販売体験を行った。できたてのショートケーキを慎重にアルミカップに入れ、緊張した表情で店頭のショーケースに運んでいた。そのケーキを客が買ってくれたとき、大きな声で「ありがとうございました。」とあいさつをし、とても嬉しそうな表情を浮かべていた。

B児は、以前、家族で食事をしに来たことがある寿司屋で販売体験を行った。ポテトサラダの分



量を量ってカップに入れたり、実際にお寿司を握ったりした。初めての体験だったが、店の人に「じょうずに握れたね。」と褒めてもらい、「大人になったら、お寿司を作る人になりたい。」と友だちに話していた。

事後学習では、販売体験の振り返りを行い、「働くこと」について考えたことを交流した。以下に示したものは、体験後の感想の一部である。

お客さんが「ありがとう。」と言ってくれてうれしかったし、楽しくお仕事ができました。1時間がみじかく感じた。お店の人は、たいへんなことを毎日つづけているから、すごいなあと思いました。はじめは何をしたらいいのかわからなかったけど、お店の人がやさしく教えてくれて、じしんがつかえました。ていねい語であいさつしたり、商品をきれいにならべたりするのは、全部お客さんのためだとわかりました。お客さんのために、いいことをしたなあと思いました。

これらの感想を見ると、販売体験を通して、販売者の工夫や苦勞だけでなく、買い物客に対する思いや仕事のやりがいを感じ取っている様子がかがえる。また、仕事をやり遂げたという満足感も得ることができたようである。

#### 〔買い物体験の様子(12~13/15H)〕

事前学習では、「消費者の願いを確かめ、かしい買い物の仕方を考えよう。」という体験の目的を示し、買い物をするときには注意すべきことや、買い物の工夫について考えた。また、計画的に買い物をするために、事前に何をかうか、家の人と相談しながら考えることにした。

買い物体験は、一人五百円を持参し、二人組で行った。図3-13は、スーパーマーケットで林檎を選んでいる様子である。



図3-13 スーパーでの買い物体験

初めて支払いを体験するC児は、緊張しながら店の人にお金を渡し、受け取ったお釣りの金額を確認して、ほっとした安堵の表情を見せた。また、買い物メモを片手に、数件の店を回り、価格を比較しながら商品選びをする子どもたちの姿も見ることができた。

事後学習では、買ったものの金額とレシートを

基に、こづかい帳に収支記録をし、買い物体験の振り返りを行った。同じ商品でも店によって分量や価格などが違うことや、必要性や優先順位などを考えて買い物をすることの大切さに気づくことができた。また、買い物客に対する店の人の心づかいに気がつくこともできた。今後は、冬休みに家族の買い物の手伝いをしたり、お年玉などの自分がつかってよいお金の収支記録をこづかい帳に記入したりする場を設定し、この学習で学んだことを実生活に生かしていくことができるように計画した。

#### 〔相談活動や評価活動での子どもの変容〕

販売体験・買い物体験は、学年全体を二つに分け、半数のグループが販売体験をしているときに、残りの半数のグループが買い物体験を行うようにした。二日目には、販売体験と買い物体験のグループが交代し、どの子も両方の体験ができるようにした。友だちが体験している様子を違う立場から見ることにより、友だちのがんばりや良さを見つけられることができたからである。

そこで、一日目の販売体験・買い物体験の後、相談活動の時間を設定した。そこでは、体験の振り返りを行うとともに、二日目の体験をするに当たっての不安や疑問などについて話し合った。以下に示したものは、あるグループの相談活動の様子である。(T...指導者)

C児：お店でどんな仕事をするのかなあ。  
D児：ちゃんとお店の人が教えてくれはるから大丈夫やったで。でも、商品を倉庫から出してきたり、買ってくれたものを袋に入れてお客さんに渡したり、忙しかった。  
E児：お金の計算もするの？ 私、計算は苦手やし心配やなあ。  
F児：計算間違いをしたらあかんし、お店の人が確かめてくれたよ。だんだん、間違わないで早く計算できるようになった。  
T：お仕事をするとき、特に気をつけたことはどんなことですか？  
D児：お客さんに元気にあいさつしたり、ていねい語で話をしたりすること。  
E児：D君が仕事しているところを見たよ。笑顔でお客さんと話してたし、すごいと思った。私も、お仕事、一生懸命がんばろっと。

これから販売体験を行うC児とE児が、不安に思っていることを打ち明けると、D児とF児が自分の経験を話し、励ましていた。また、指導者が、どのような態度で仕事をすればよいのかという問

いかけをすることにより，仕事内容を身につけるための体験ではなく，販売者の工夫や思いを知るために体験をするのだということが子どもたちに伝わったと思われる。販売体験の当日のC児とE児は，友だちの励ましやアドバイスを生かし，積極的に接客をしている様子が見られた。

評価活動は，第3学年でも，ほぼ毎時間，振り返りカードを活用した。

個別のめあてを立てにくい場合は，「買い物調べをして，わかったことを交流しよう。」「スーパーマーケットのひみつをさぐるため，学習問題を作ろう。」などのように，全員同じめあてをカードに記入した。一方，体験活動を行う際には，「多くのお客さんに来てもらえるように，自分からあいさつをする。」「安く新鮮なものをさがして買い物をする。」というように，一人一人ががんばろうと思っていることを個別のめあてとして記入した。そして，活動の振り返りのときに，自分が立てためあてに対する自己評価を行った。中には，「商品をきれいにならべたら，とても気持ちよかったです。家で物を片づけようと思った。」というように，これからの生活にめあてをもつことができるようになった。体験を通して，自分の生活の課題に気づき，改善していこうという気持ちが高まったと考える。

### 第3節 第5学年「総合的な学習の時間」

#### ～お母さん体験・保育体験・救急救命体験～

(1) いのちのつながりを意識した取組の工夫  
総合的な学習の時間『ライフ(生命の誕生)』(全27時間)の単元目標は，以下のとおりである。

自分の命が様々なつながりの中で支えられて生きていることに気づき，そのかけがえのない生命を大切に，これからも自他を尊重しながら力強く生きていこうとする心情を育てる。

本単元は，誕生から今までの自分史を作成する活動を通して，自分の在り方や自分を取り巻く様々な人とのかかわりを見つめ直し，生命の大切さや，よりよい生き方を自分なりに考えていこうという学習である。誕生から現在に至るまでの成長の記録を自分史という形で残すことにより，自分や他者の命がかけがえのないものであることを改めて感じ取り，「将来，こんな大人になりたい。」という目標やあこがれをもってこれからの生き方を考えてほしいという指導者の願いを踏まえ，学習計画を立てることにした。

### 〔生き方探究教育との関連〕

図3-14は，本単元の学習計画と，生き方探究教育で育てたい“5領域17の力”の関連を示したものである。

#### ～第5学年 総合的な学習の時間「ライフ(生命の誕生)」～

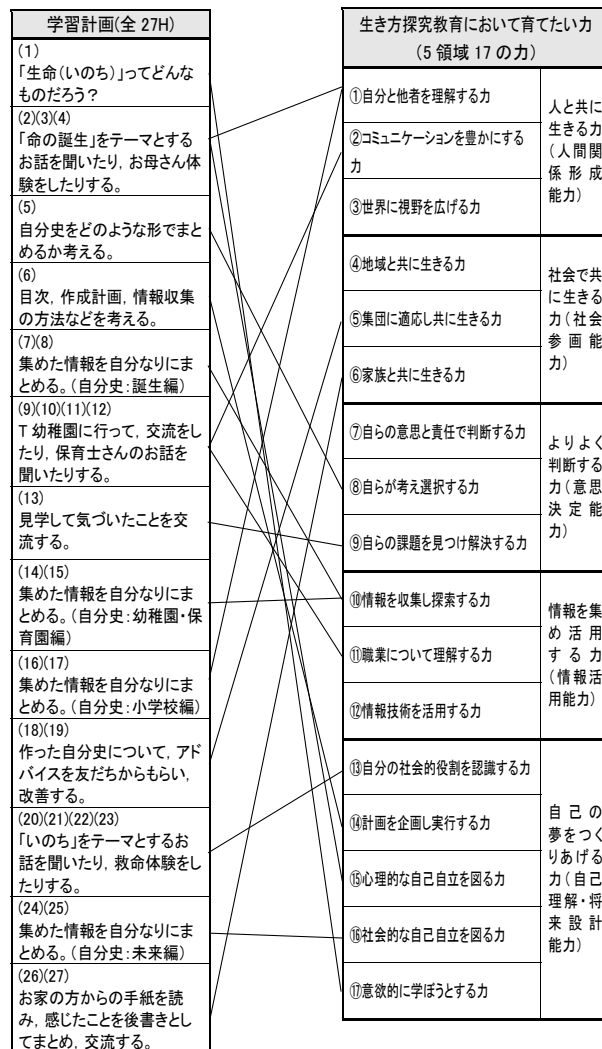


図3-14 本単元の学習計画と“5領域17の力”との関連

高学年時期のキャリア発達の目標は，「自己を認め，将来の夢のイメージをつくる・働くことの大切さや苦勞や喜びを知る」(36)である。そこで，理科『たんじょうのふしぎ(人のたんじょう)』の発展学習として，自分の生まれたときの様子やそのときの家族の思いなどについて家の人に聞き取りを行った。そして，様々な人から大切に思われ，支えられてこの世に生まれてきたのだということや，自分の存在が家族の幸せにつながっていることに改めて気づくことができるようにしたいと考えた。このことが，自分の在り方や存在価値を考えるきっかけとなり，自己理解能力を大きくむことにつながると考えたからである。

聞き取りを行う前には，学級通信や懇談会を通

じて、すべての保護者に本単元の学習と聞き取り活動のねらいを知らせた。そして、学習を進めるに当たっては、本人と保護者の意思を尊重して、可能な範囲で調べ学習や情報収集が進められるようにした。

また、外部講師である妊婦の方や幼稚園の先生、救急救命士の方との出会いの場を設定する中で、「生命」や「生きること」の尊さを知るとともに、家庭や社会の中で働き、生きている大人の姿を間近で見たり、話を聞いたりさせたいと考えた。このことが、将来の夢のイメージを作り上げるきっかけとなり、将来設計能力をはぐくむことにつながると考えたからである。

このように、自分の在り方を見つめ直し、これから先、家庭や社会の中でどのように生きていきたいのかということを考える活動を通して、「いのちのつながり」を意識することができるよう、実践授業を進めた。

#### 〔体験的な学習における工夫〕

ゲストティーチャーを招いて、「いのち」の誕生やその尊さにかかわる話を聞いたり実際に体験したりする活動を、単元の中に三度、組み入れることにした。

一度目は、妊婦の方をゲストティーチャーとして迎え、出産のときの様子や、育児の話を聞くことにした。また、赤ちゃん人形をだっこしたり、実際に乳児と触れ合って遊んだり、妊婦擬似セットを装着したりして、お母さん体験を行うようにした。このことにより、出産を迎える母親の様子や思いを知るとともに、「自分の場合はどうだったのだろう。」「もっと自分のことを知りたい。」という意欲が高まり、自分史を書く動機づけになると考えたからである。

二度目は、学区内の幼稚園に出かけ、保育体験をすることにした。園長先生から、園児の様子や保育で大切にしていることなどの話を聞き、その後、自分が希望するクラスの保育を見学したり、実際に園児と交流したりするようにした。このことが、自分の幼稚園時代のことを思い出すきっかけになると考えたからである。また、園児とのかかわり方を考えて行動したり、幼稚園の先生の仕事の様子や思いを感じ取ったりすることができると思った。

三度目は、救急救命士の方をゲストティーチャーとして迎え、命に携わる仕事についての話を聞くことにした。また、傷病の応急処置の方法

を聞いたり、AED(自動体外式除細動器)を使った心肺蘇生法を体験したりするようにした。このことにより、かけがえのない命の存在を改めて実感し、自分や他者の命を大切にしていこうという気持ちを高めることができると考えたからである。また、消防士や救急救命士という仕事についての理解を深めることで、いろいろな仕事があることを知り、「こんな仕事に就きたい。」「こんな生き方をしたい。」という思いを抱くことができ、将来像を考えるきっかけになると考えた。

#### (2) 子どもの姿から

##### 〔お母さん体験の様子(2~4/27H)〕

事前学習では、「出産のときの様子や、お母さんの思いを知ろう。」という“お母さん体験”の目的を明確に示した。また、妊婦の方への質問をあらかじめ考え、一人一人が課題意識をもって活動に臨めるようにした。以下に示したものは、児童が事前に考えた 妊婦の方への質問の一部である。

おなかの中に赤ちゃんがいるとき、気をつけていることは何ですか？  
赤ちゃんの名前って、だれが、どうやってつけたのですか？  
赤ちゃんを産むとき、不安なことや怖くなったことはないですか。  
お母さんになってよかったと思うときは、どんなときですか？

活動の当日は、妊婦の方から赤ちゃんの誕生に関する話をしてもらい、その後、子どもたちからの質問に答えてもらった。さらに、「赤ちゃん人形をだっこ」「妊婦擬似セットの装着体験」「乳児との触れ合い」の三つの体験を全員が行った。図3-15は、約6kgある妊婦擬似セットの装着体験を行っている様子である。



図3-15 妊婦擬似セットの装着体験

一歳の乳児と実際に触れ合う場面では、目の前にいる乳児とどのように接したらよいのかわからず、最初、とまどっていた子どもも数名いたが、乳児とおもちゃで遊ぶうちに子どもたちの笑顔が増え、幼い子にもわかる言葉づかいをし、ゆっくり話す姿が見られた。

以下に示したものは、「お母さん体験」後の感想の一部である。

理科で学習したから、産まれたばかりの赤ちゃんは約3kgの重さだっことを知っていたけれど、赤ちゃん人形をだっこしてみたら、首がぐらぐらだし、想像より重くて大きくてびっくりしました。

ぼくを産むためにしんどかったらうけど、産んでくれたから、母は大切です。

前は、出産ってこわいと思っていたけれど、S君とお母さんを見ていて、私もかわいい赤ちゃんを産んでみたいと思いました。

これらの感想からわかるように、子どもたちは、今までに習得した知識や人から聞いてイメージしていたことと、実際に体験してみてもわかったことには違いがあったと感じていることがわかる。「お母さん体験」をしなければ、教科書に書いてある新生児の体の大きさはわかってても、首が不安定な新生児を慎重に抱き上げる親の様子や、出産時の母親の苦勞、命の誕生の尊さや喜びなどに気づけなかったかもしれない。体験を通して、親への感謝の気持ちも高まったと考えられる。

事後学習では、「お母さん体験」での感想を交流し、今後の学習でしてみたいことを考えた。「ぼくが産まれたときの様子をくわしく知りたい。」「わたしの名前はだれがどうやってつけてくれたのか、聞いてみたい。」「小さいころについて調べたことや写真などをまとめて、アルバムみたいなものを作りたいな。」など、次時のめあてをもつことができた。

〔T幼稚園での保育体験の様子(9~12/27H)〕

事前学習では、「園児や幼稚園の先生の様子を知り、園児と仲よく交流しよう。」という体験の目的を明確に示した。また、「保育体験」での自分のめあてを立て、積極的に活動ができるようにした。以下に示したものは、事前に子どもたちが立てためあての一部である。

小さい子はどんな風に遊んでいるのか見てみたい。また、自分からも話しかけてみたい。園児と仲よく遊びたい。名前と顔を覚えて帰りたい。

先生はどんなことをしているのか知りたい。

活動の当日は、園長先生から幼稚園についての話を聞いた後、年長組の園児たちと数種類のゲームをして交流したり、各クラスに入って園児といっしょに様々な活動をしたりした。最初のころは緊張気味だったが、時間が経つにつれ、園児に優しく声をかけたり、手助けをしたり、絵本を読

んだりして、積極的にかかわろうとする姿を見ることができた。

図3-16は、年少組の園児に、色塗りのアドバイスをしている様子である。



図3-16 園児に色塗りのアドバイスをしている様子

事後学習では、「保育体験」を振り返って感想を交流した。「園児が喜んでくれているのがわかったし、うれしかった。先生のお手伝いができてよかった。」という感想からは、自分が誰かの役に立ったという満足感を得ることができた様子が伝わってくる。また、「園児に着替えのこつを教えてあげたら、一人でできるようになって、とても嬉しそうだった。自分も嬉しくなったから、幼稚園の先生もこんな気持ちで仕事をしているのかなと思った。」という感想からは、先生という仕事のやりがいを感じ取っていることがわかる。また、活動後、T幼稚園の先生方にお礼の手紙を書いた。以下に示したものは、手紙の一部である。

園児さんたちはとてもかわいかったです。名前をよんだら「はい。」って返事してくれました。自分の幼稚園のときのことが、たくさん頭に浮かんできました。とてもなつかしかったです。久しぶりに先生たちに会えてよかったです。先生と植えたびわの木が大きくなっていたのでうれしかったです。また、ここに来て、園児たちと遊びたいです。

先生はいつも笑顔で子どもたちと接していて、「すごい。」と思いました。ぼくが6年生になったら、あの子たちが1年生として入学してくるので、ぼくも笑顔で優しくしたいです。

これらの手紙の内容からわかるように、園児たちとの交流体験を通して、幼児のころの自分の姿と重ね合わせたり、比較したりしながら、成長を振り返ることができた。また、一年先の園児たちと自分とのかかわり方を考え、なりたい姿を思い描くきっかけにすることができたと考える。

〔救急救命体験の様子(20~23/27H)〕

事前学習では、「命の大切さとともに、救命に携わる方の仕事に対する思いを知ろう。」という体験の目的を明確に示した。また、友だちの病気やけがの経験エピソードを聞き合い、様々な人のおかげで、健康で安全な生活を送ることができていることを確認した。

活動の当日は、救急救命士の方から、仕事内容、就職のきっかけ、現場での体験談、仕事に対する思いなどの話を聞いた。その後、簡単なけがの応急処置の方法を教えてもらい、AED使用と人形を使った胸骨圧迫(心臓マッサージ)の体験を行った。「緊急事態の場合や周りに大人がいない場合は、たとえ子どもであっても、君たちが心肺蘇生をして欲しい。一つの命が、なくならずに済むのだから。」という救急救命士の方の言葉を聞き、子どもたちの表情は一変した。図3-17は、胸骨圧迫の仕方の説明を聞いている様子である。この後、子どもたちは全員、真剣に体験に臨むことができた。



図3-17 胸骨圧迫の仕方の説明を聞いている様子

事後学習では、「救急救命体験」で学んだことをワークシートに書き記し、クラス全体で交流した。以下に示したものは、感想の一部である。

お話を聞いて、自分の命はいろいろな人に守られているということがわかりました。119番通報で、いたずらや「死にたい。」という電話があることにおどろいたし、嫌な気持ちになりました。私は、止める側になりたいです。火に立ち向かい、現場で何回も人の命を助けた消防士さんたちはすごいと思います。命を救う仕事って、かっこよくてやりがいがあると思います。みんな仕事をしているけど、お金をもうけることだけじゃなくて、助け合ったり、命をみんなで守ったりしているんだと思いました。みんなの命を守るため、危険に立ち向かって救助に行くというのはすごく心強いし、かっこよすぎると思いました。ぼくは、救命士になりたいと思いました。

これらの感想からわかるように、命は、親子間のつながりだけではなく、様々な人によって守られたり救われたりしてつながっていることを理解することができたと思われる。また、救急救命士の方との出会いを通して、命に携わる大人の働く姿を知ることができた。「困っている人を助けることができる人になりたい。」「だれかの役に立つ仕事がしてみたい。」という感想から、この救急救命体験によって、大人へのあこがれを抱くことや、自分の将来像を描くこともできたと思われる。

〔相談活動や評価活動での子どもの変容〕

本単元の学習を始める前に、研究協力校の第5学年23名を対象にアンケート調査を行っている。

「つきたい仕事や夢について、次のことをしているとと思いますか?」という問いを設定し、例示する六つの項目に対し、「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4択で回答を求めた。

図3-18は、「つきたい仕事や夢」に関する設問項目について、回答人数の割合をグラフ化したものである。

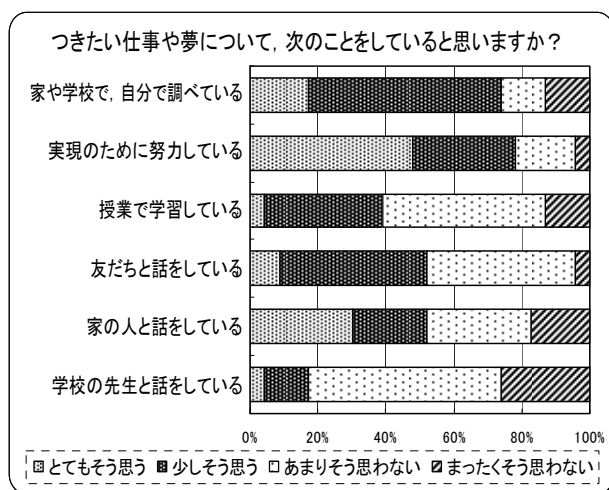


図3-18 「つきたい仕事や夢」に関する調査結果

まず、上位三つの設問項目について、検討した。

「家や学校で、自分で調べている」という項目について、「とてもそう思う」「少しそう思う」と肯定的に回答した割合は73.9%であった。また、「実現のために努力している」という項目について、肯定的に回答した割合は78.3%であった。

これらのことから、約3/4の子どもたちが、将来就きたい仕事やなりたい大人像を思い描き、その仕事や夢について自分で調べたり、実現できるよう努力したりしている様子がうかがえる。

一方、「授業で学習している」という項目について肯定的に回答した割合は39.1%であり、半数を下回っていた。これは、仕事や夢をテーマとして採り上げて、授業時間内に学習する機会が少ないことを示唆しているのではないかと考えられる。

では、子どもたちは、自分の将来の夢について、だれと話をしているのだろうか。このことについて、下位三つの設問項目で検討した。

「友だちと話をしている」「家の人と話をしている」という項目について、肯定的に回答した割合は、それぞれ52.2%であった。

一方、「学校の先生と話をしている」という項

目については17.4%であり、前述した二つの項目に比べて低い回答割合を示していた。

小学校段階は、人間形成において重要な時期である。そこで、学校生活の中に、友だちや身近な大人である先生と将来について語り合う機会をもっと設けることが大切だと思われる。

これらのことから、興味のあることや自分の可能性を知り、将来像を思い描くことができるようになるために、授業時間の中に、自分が就きたいと思う仕事や将来の夢について考えたり調べたりする場を設定する必要があると考えた。また、そのことについて、友だちや担任である指導者と話したりすることができる場、つまり、相談活動の時間を設定する必要があると考えた。

そこで、本実践では、自分史の未来編を書く際に相談活動の時間を設定した。ここでは、どのような将来像を描いているのか、不安や悩みはないかということや友だち同士で語り合うことにした。以下に示したものは、あるグループの相談活動の様子である。(T…指導者)

- A児：わたしは、今でもまんが家になりたいと思う。絵を描くのが好きやし、友だちが「うまい。」って言ってくれたから。
- B児：まんがは、何歳になっても描き続けることができるからいいなあ。ぼくはプロ野球選手になりたいけど、年とったらやめなあかんし、どうしようかな。
- A児：監督とか、野球解説者になれるやん。
- C児：ぼくは、絶滅危惧種のカエルを救いたい。
- D児：そんな仕事あるの？
- T：大学院で勉強して、将来、カエルの研究者になったらどうですか。
- C児：そうか。お金はいらないと思ってたけど、そうしたら生活もできるし、絶滅しそうなカエルも救えるなあ。
- D児：Cさんってすごいなあ。意外やった。いい夢やなあ。勉強、がんばりや。

A児は、友だちに自分の良さを認めてもらったことが自信につながり、自分の得意分野を今後も伸ばしていきたいと考えていると思われる。

B児は、将来の夢を一時期だけのものではなく、長い期間のものとして考えていると思われる。自分の興味があることを長く続けていくことができるのかという不安を友だちに話し、A児からアドバイスをもらうことによって、安心した表情を見せ、「そうやなあ。」とうなずいていた。

C児は、興味のあることをしたいというはっきりとした将来の希望をもっている。しかし、その

夢が将来の仕事や生き方と結びつかず、実現するために、今何をしなければいけないのかということがわからなかったと思われる。そこで、指導者が、夢を現実のものにするためのアドバイスを行った。C児は、ぼんやりとした夢を、現実のものとして近づけ、目標とし、実現するためにどのような努力が必要なのかを考えるきっかけにすることができたと思われる。そのようなC児の将来の夢を知ったD児は、C児に対して素直に応援の気持ちを伝えている。今まで気づけなかった友だちの良さを見つけることができたようである。

また、C児は、単元の最後の時間に、「『ライフ』の学習をして、みんなの考え方がだんだん変わっていったと思う。ぼくも、命に対して、今までよりも真剣に考えるようになったし、将来の夢についてそれぞれいっぱい考えているんだなあと思った。」と感想を発表していた。自分史を作るという活動だけでなく、相談活動の中で、これからの生き方につながる助言や励ましの言葉を友だちと交流し合えたことが、自分と向き合い、将来を考えることにつながったと思われる。

評価活動については、第5学年でも、毎時間振り返りカードを活用し、自己評価を行った。

学習の最初に立てる自分のめあては、「自分史の誕生編をわかりやすくまとめる。」「園児の名前と顔を覚えて仲よくなる。」というように、具体的に書くことができるようになった。また、学習のまとめとして、満足度と一言感想を振り返りカードに記入した後、数名が発表する場を設定し、必要に応じて指導者が支援や指導を加えた。このことにより、めあてに対する適切な振り返りの仕方がわかり、自己評価能力を高めることができたと考えられる。

また、単元を通して、学習の軌跡や自分の考えの変容を知ることができた。振り返りカードを、作成した自分史と一緒にファイルに綴じ、他の単元や次年度の学習においても活用していきたいと考えている。

(30)京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画 生活科』 2005.4 1・2-生-70

(31)前掲(30) 1・2-生-70～73

(32)前掲(10) pp..9～10

(33)京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画 社会科』 2005.4 3・4-社-12

(34)前掲(33) 3・4-社-12～16

(35)前掲(10) pp..9～10

(36)前掲(10) pp..9～10

## 第4章 生き方探究教育の さらなる充実を求めて

### 第1節 研究の成果と課題

#### (1) 体験的な学習を取り入れた学習計画

前章では、子どもが生活や社会との関連に気づくことができる体験的な学習を、各教科等の教育活動の中に効果的に組み入れていくために、どのような工夫が具体的にできるのかについて述べてきた。成果として、次の三点が挙げられる。

一点目は、「夢や職業」「生き方」に視点をおき、発達段階や各教科等の学習のねらいに応じた体験活動を組み入れることにより、働くことや生きることの意味を考えたり、自分の将来像を描いたりすることができるようになったことである。

第3学年の実践では、地域の商店街での販売体験や買い物体験を通して、自分たちの生活と社会の様々な仕事とのつながりについて理解することができた。また、商店やスーパーマーケットという職場で大人と一緒に仕事をする事により、店の特徴を知るだけでなく、販売に携わる人々の工夫や苦労、やりがいや願いなどを実感することができた。働くとはどういうことなのか、自分はみんなのためにどのようなことができるのかということ、子どもは自分なりに考えることができたと思われる。

二点目は、体験活動の事前学習において、体験の目的を明確にし、計画・準備の段階に十分な時間をかけることにより、一人一人が学習の見通しをもち、主体的に学習活動を進めることができるようになったことである。

第2学年の実践では、フェスティバル開催に向けての活動計画カレンダーをグループのメンバーと話し合って作成することを通して、見通しをもって計画的に作業を進めたり、作業の進捗を確認しながら、効率よく活動を行ったりすることができた。また、“リーダー”といった役割分担をして準備を進めることを通して、集団の中での自分の役割を意識したり、自分のできることややるべきことを、責任をもってやり遂げようと努力したりすることができた。事前の計画や準備の大切さを実感することができ、将来設計能力をはぐくむことにつながったと思われる。

三点目は、体験活動の事後学習において、思いや考えを言語化する場を設定することにより、一人一人が活動の意味や価値について考えたり、自

分の能力や可能性に気づき、自己理解を深めたりすることができるようになったことである。

第5学年の実践では、お母さん体験や保育体験、救急救命体験を通して、人の成長の様子や他者とのかかわり、いのちのつながりを理解することができた。また、体験活動後の感想文やお世話になった方への手紙を書く活動とともに、これらの体験を、自分を見つめ直すきっかけとし、調べたことや現在思っていることを“自分史”という形にまとめることを通して、自己理解を深めることができた。さらに、今までの自分の在り方について気づいたことや将来像について思い描いていることを友だちと交流することで、今、そしてこれから先、自分は何をしなければならないのかということを考えることができるようになったと思われる。

各教科等の教育活動の工夫において、これらの成果が認められたが、課題も見えてきた。それは、体験的な学習において学んだことや身につけた力、高まった意欲を、他教科や実生活で活用する場を設定する工夫が必要だということである。

生活や社会との関連に気づくことができるような体験的な学習は、生き方を考えたり、生きる力そのものをはぐくんだりする上で、大変効果的であった。そこで、それぞれの体験によって高められた子どもの学習意欲や能力を、一時的なもので終わらせず、定着させるための支援や工夫が必要だと考える。

例えば、第2学年の実践後には、「給食感謝パーティーをしよう。」という学習活動を設定し、学級活動の時間に自分たちで企画・運営をするという場を設けることができるだろう。第3学年や第5学年では、今回の実践授業でかかわった仕事とは違う分野で働く方を招待して話を聞いたり、職場体験をしたり、京都市スチューデントシティ学習に関連づけたりすることも可能である。また、家庭学習や長期休業中の課題として、家庭生活で実践する場を意図的に設けるなどの工夫もできるだろう。

このように、体験的な学習を単なるイベントとして終わらせるのではなく、何のためにこの体験をするのかという目的を子ども自身が明確にもつことや、体験において高めた意欲や力をすべての教育活動や実生活において活用する場を意図的・計画的に設定することが重要である。このことが、体験的な学習をより効果的にし、生き方探究教育を充実させていくことにつながると考える。

## (2) つながりを意識した個に対する働きかけ

前章では、個に応じた指導や支援である相談活動と、振り返りカードなどによる評価活動が、実践授業の中でどのように行われたのか、子どもはどのように変容したのかについても述べてきた。成果としては、次の三点が挙げられる。

一点目は、子ども同士や指導者による相談活動を授業の中に取り入れることにより、子ども自身が客観的に自分を見たり、自分に対する視野を広げたりすることができ、自己理解が深まったことである。

第2学年では、グループ活動の後に振り返り会議を設定し、自分や友だちの良いところを認め合ったり、改善点を話し合ったりした。第3学年・第5学年でも、少人数グループでの相談活動の時間を随時設定し、指導者も交えながら子ども一人一人に応じた対話や、必要に応じて、指導・支援を行った。協同的な学びの場で、“他者から見える自分を知る”という活動を通して、自分では気づかなかった良さや役割を知ったり、自分は誰かの役に立っているのだという役立ち感や自己有用感を実感したりすることができたと思われる。

また、指導者が、子どもの特性やおかれている状況、思いや考え方に迫る個別の指導や支援をすることにより、子どもは、ものごとや自分の在り方を肯定的にとらえ、自分の能力や可能性をより深く知ることができたと思われる。

二点目は、自分に合った課題設定や自己評価を行うことにより、過去と現在の自分の変容を子ども自身が実感することができるようになったことである。

全実践授業において、毎時間、学習活動を一人で振り返る時間を設け、カードに記入し、学習の足跡を残していった。単元の学習が進むにつれ、1時間の学習の振り返りを、「これができた。」「あれができなかった。」という結果だけで終わらせるのではなく、次時の学習やこれからの生活を考える上でどのように生かすかといった、将来を見据えた評価活動ができるようになった。“現在の自分を見つめて書く”という活動を繰り返し行うことにより、自己評価能力が高まったと思われる。

また、学習の最初には、前時の自己評価を基に、具体的な自分のめあてを立てる活動を行った。学習活動に対する評価が具体的になり、課題を明確にもつことができるようになったことは、次に自分は何をしなければならないのかということを考えるといった、将来設計能力をはぐくむことにつ

ながった。また、学習の見通しやゴールの姿をイメージすることができ、学習意欲も高まったと思われる。

三点目は、相談活動や評価活動を充実させることにより、指導者が、子ども一人一人のキャリア発達を詳細に把握することができるようになったことである。

相談活動において、その子に応じた意図的な対話をすることにより、指導者は、今の時点でその子がどのような考えや能力をもっているのかということ、直接、理解することができた。また、評価活動において活用した、ワークシートや毎時間記入した振り返りカードなどを見ることにより、その子の思いや意欲がどのように変容していったのかということを見取る、参考資料にすることができた。

友だちや指導者といった人とのつながり、過去・現在・未来といった時間のつながりを意識した、これらの個に対する働きかけはすべて、子ども一人一人のキャリア発達を支援し、学ぶことや生きることへの関心や意欲を高める効果があったと思われる。

その一方、課題も見えてきた。指導者が見取った子ども一人一人のキャリア発達を、継続的に記録に残し、次年度に持ち上げる必要があるということである。小学校から中学校への申し送りも同様である。子ども一人一人の能力や態度、資質は、生涯にわたり、段階を追って育成されるものである。各時期にふさわしいキャリア発達の課題を達成したかということ、相談活動や評価活動で把握し、小学校6年間、あるいは義務教育9年間、就学期間といった長い時間を費やして子どもを育てていくことが大切である。そのために、子ども一人一人のキャリア発達を見取った記録を積み重ね、次年度の指導に生かすという視点が大切だと考えるからである。

このように、自他の良さや特性を認め合い、お互いに高め合って人は成長していくという『共生』の観点や、自己のありのままの姿を認識し、主体的に学び、生きていくという『自立』の観点を意識し、個に応じた働きかけをすることは、生き方探究教育を進める上で重要なことである。そこで、できるだけ早い時期から子ども一人一人のキャリア発達を支援することができるよう、各教科等の枠を超え、すべての教育活動において、相談活動や評価活動を工夫し、積極的に取り入れていくことが必要だと考える。



## 第2節 今後の取組に向けて

本節では、2年間の研究の成果と課題を踏まえ、生き方探究教育をさらに充実させるために、今後どのような取組を進めていけばよいのかということ述べる。

### (1) 生き方探究教育推進の六つの手順

学校教育において生き方探究教育を進めていくためには、学校経営方針に生き方探究教育を位置づける必要がある。また、全教職員が生き方探究教育について共通理解し、機能的に進めていくことができるよう、適切な組織を作ることが重要である。さらに、生き方探究教育は、地域・社会とのかかわりの中で生き方を考え、生きる力をはぐくむ教育であることから、地域との連携が不可欠であり、校外の諸機関との連携を図ることができるようになることも大切である。これらのことから、各学校において生き方探究教育を推進していくためには、次のような手順例が考えられる。

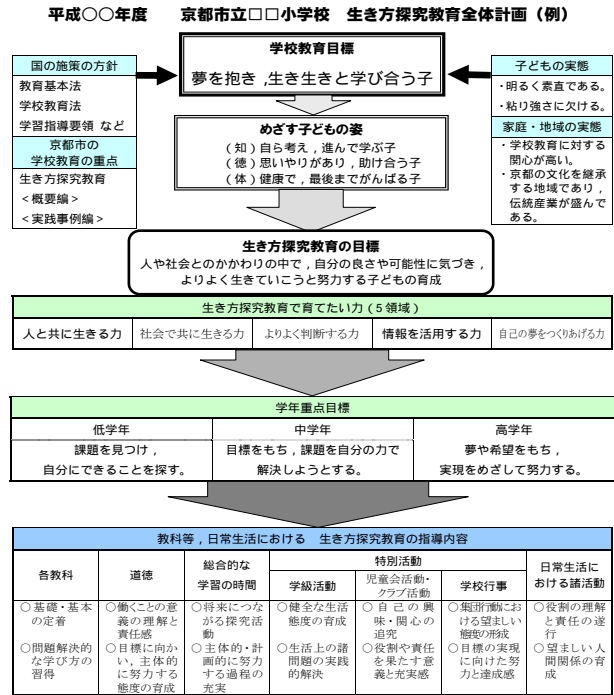


図4-1 生き方探究教育全体計画(例)

### 校内(学年)研修の企画・実施

教職員の生き方探究教育についての共通理解を図る。校内研修の内容例を以下に示す。

生き方探究教育のねらい  
 生き方探究教育で育てたい“5領域17の力”と本校で重点的に育てたい力  
 生き方探究教育の指導計画作成  
 地域や異校種との連携の必要性  
 キャリアカウンセリングの考え方 など

また、学年研修会において、各学年で高める“5領域17の力”を重点化することも可能である。

### 生き方探究教育年間指導計画の作成

まず、第1章で示した「生き方探究教育の視点で見直すポイント」(前掲:図1-3)などを参考にし、“5領域17の力”を視点に、すべての教育課程を見直す。次に、重点的に取り組む教科等や単元を設定し、指導計画作成する。

年間指導計画については、第1章で示した「5領域と学習内容との関連表(例)」(前掲:表1-3)や、<概要編>にある、「生き方を考え生きる力を育む『生き方探究教育』に関する教科・領域活動例」(38)などを参考にし、他教科等との関連や隣接学年の学習内容との系統性を考慮しながら立案する。さらに、学校の特色や課題、年間行事計画等との関連を踏まえながら、工夫ある計画を立てるようにする。

### 育てたい子ども像の明確化・

#### 生き方探究教育全体計画の作成

まず、子どものキャリア発達を考え、生き方探究教育の視点を踏まえた、育てたい子どもの姿を明らかにする。第1章で示した「“5領域17の力”にかかわるキャリア発達課題(例)」(前掲:表1-3)を参考に、学校の実態に応じた育てたい子どもの姿を明確にすることが望まれる。

次に、学校教育目標や学校経営方針等の中に生き方探究教育を位置づけ、全体計画作成する。全体計画については、右上に示した「生き方探究教育全体計画(例)」(図4-1)や、<概要編>にある「全体計画作成例(小学校例)」(37)などを参考にし、年度当初に作成するようにする。この全体計画は、学年別年間指導計画や学習指導案、行事計画などを作成する際の指針となる。

### 生き方探究教育推進委員会(仮称)の設置

生き方探究教育を学校全体で推進していくための校内組織を、校務分掌の中に設置する。構成員は、関係する各分掌・学年の代表者などとする。

ここでは、生き方探究教育の推進についての検討・提案を行う。また、校内研修会(学年研修会)を企画・設定する。さらに、校内の各委員会や、異校種間、地域の関係機関との連携を進めるための、連絡調整や情報交換を行う。

## 生き方探究教育の実践

各単元や単位時間の授業における学習活動を計画立案し、実践する。ここでは、子ども一人一人のキャリア発達の見取りや実践の評価を行い、記録に残していく。さらに、日々の実践を教職員間で紹介し合い、情報交換を行う。実践の評価の観点例を以下に示す。

目標設定について(目標の設定は、具体的で妥当であったか。子どもの実態に即していたか。) 学習計画について(各教科等のねらいや内容と合致した、適切な計画になっていたか。) 実践の様子について(子どもの変容はどうか。指導上の工夫はなされていたか。) 目標の達成状況(子どもの学習意欲や理解は十分であったか。) 評価を受けての改善点(何をどのように改善すべきか。)

## 生き方探究教育の評価と改善

年度末には、学校体制で取り組んだ生き方探究教育の評価を行う。ここでは、教職員全員で、自校の取組や校内研修の在り方などについての振り返りを行う。また、これらの評価を基に、改善点を明らかにし、次年度の取組に反映させる。

図4-2は、学校における生き方探究教育の取組評価シート(例)である。これについては、全教職員が実施し、生き方探究教育推進委員会(仮称)で集約する。

生き方探究教育の取組評価シート(例)	
◆1年間の生き方探究教育の取組を振り返り、あてはまると思うものに○をつけてください。また、成果と課題について、検討してください。	
評価	項目
<生き方探究教育に関する研修について>	
	生き方探究教育について、理解が深まった。
	キャリア発達課題や“5領域17の力”について、理解が深まった。
	生き方探究教育の指導計画の作成について、理解が深まった。
	生き方探究教育における地域や異校種間の連携について、理解が深まった。
	キャリアカウンセリングの考え方について、理解が深まった。
<生き方探究教育の実践について>	
	生き方探究教育の視点で教育活動を行った。
	家庭や地域、異校種と連携して、生き方探究教育を実践した。
	生き方探究教育の全体計画や年間指導計画の作成に参画した。
	子どものキャリア発達の見取りを記録し、個別の支援・指導に生かした。
	生き方探究教育の実践の評価を行い、授業改善に生かした。
<今年度の成果と来年度への課題>	

図4-2 生き方探究教育の取組評価シート(例)

このように、すべての教職員が、生き方探究教育の方針や内容を十分理解し、各分掌間や関係諸機関との情報交換を行いながら、組織的・機能的に推進していくことが必要である。このことにより、学校体制で生き方探究教育を推進することができる。と考える。

## (2) キャリアノート作成のすすめ

前節で述べたように、学習の軌跡や考えの変容を記したワークシートや振り返りカードは、子ども自身が自分の成長を振り返ったり、指導者が子どものキャリア発達を見取り、支援したりする際の参考資料となる。そこで、これらの資料を蓄積し、「働くことや生きることを通して、自らの在り方や将来を考える」という目的をもったポートフォリオ(以下、“キャリアノート”とする。)を作成することは、よりよい自己実現をめざす上で、大変効果がある。と考える。

キャリアノートを作成する際には、単元や教科等の枠にとらわれず、生き方探究教育にかかわる学習資料や作品、心身の成長がわかる記録などを綴じていくようにしたい。

図4-3は、特別活動を柱として進める、小学校生き方探究教育の年間計画(例)である。

月	キャリア/領域	テーマ【5領域の力】	内 容			具体的な活動
			1・2年	3・4年	5・6年	
4		1年間の目標と計画を立てよう【自己理解・将来設計能力】	さあ、スタート! □年生!! (学習面・生活面のめあて)			めあてカード
5		役割や責任について考えよう【人間関係形成能力】	どうぼん・かかりのしごとのたつじんになろう!	前期の当番・係活動の工夫	前期の当番・係・委員会活動の工夫	
6		約束や規則について考えよう【意思決定能力】	まもっているかな? じかんややくく	守っているかな? クラスや学校のきまり	守っているかな? ルールや公共マナー	チェックシート
7		家庭や地域社会のためにできることを考えよう【社会参画能力】	おてつだい 大きくせん!	学校いきいき 大作戦! (あいさつ運動)	社会奉仕 大作戦! (地域清掃活動)	環境・安全・福祉・ボランティア活動
8		友だちのいいところを見つけよう【人間関係形成能力】	ともだちのキラリはつけん	友だちに伝えよう。	知っているよ、友だちの	
9				ありがとうメッセージ	優しく思いやり	
10		前期の振り返りをしよ 後期の目標と計画を立てよう【自己理解・将来設計能力】	前期をふりかえり 後期にがんばること			振り返りカード めあてカード
11		自分の仕事や役割を見直そう【人間関係形成能力】	たのしい どうぼん・かきかづよう	後期の当番・係活動の工夫	後期の当番・係・クラブ活動・異年齢集団の中での役割	縦割り班での活動
12		家庭生活を見直そう【社会参画能力】	おてつだい大きくせん! パート2	わが家の “もったいない” 直後	家族へのプレゼント	
1		達人や偉人の考え方や生き方を 知る【情報活用能力】	みつけたよ、○○めいじん・△△たつじん	ぼく・わたしのヒーロー・ヒロイン	あこがれの 達人・偉人	本やインターネットでの調べ学習
2		くらしとお金について考えよう【意思決定能力】 ※1・3・5年	ただいいお金のつかいかた	お金はどこからやってくる? 大切な	欲しいもの必要なもの	買い物帳
		情報モラルについて知ろう【情報活用能力】 ※2・4・6年	やめよう、わる口やらがき	個人情報	正しい情報? 必要な情報?	
3		なぜ働くのか考えよう【情報活用能力】 ※1・3・5年	さがしてみよう。はたらく人たちは	知りたいな、こんなお仕事	お仕事探検隊 (職場体験)	販売体験 SC学習
		将来・未来を考えよう【自己理解・将来設計能力】 ※2・4・6年	ドリームカードをつくらう	大人になった自分への手紙	“未来樹”を描いてみよう	1/2 成人式
年度末		1年間の振り返りをしよ 後期の目標と計画を立てよう【自己理解・将来設計能力】	ふりかえろう! □年生!! (学習面・生活面のふりかえり)			振り返りカード

図4-3 小学校生き方探究教育の年間計画(例)

この年間計画は、月ごとに、生き方探究教育で育てたい力に関連のあるテーマを設定し、発達段階に応じた内容の取組を進めるといったものである。この取組において活用したワークシートなども、キャリアノートの材料になると考えられる。

次頁の図4-4に示したものは、1・2年生用のめあてカード(指導者版)である。これは、各学期の初めに活用する。

(キャリアノート：1・2年生用)

**4月：1年間の目標と計画を立てよう【自己理解・将来設計能力】**

ねん くみ ( )

こんな 年生になりたい!!

自画像の絵を描いたり、写真をはったりする。

年間の大目標を記入する。

※1年生は、文字がまだ書けないので、はじめて書いた名前の作品などをはるようになる。

前編 (4月～9月) のめあて

がくしゅう： 4月に教室に掲示した“めあてカード”をのりづけしてもよい。

せいしかつ：

しんちょう…

たいじゅう…

ざごう…

学年のスタート時の自分の姿がわかるものを記入できるとよい。  
(例)・4月の発育測定の結果  
・クラス写真をはる

図4-4 めあてカード (1・2年生用：指導者版)

このめあてカードは、個々に応じた自分のめあてを設定し、記入するものである。下段には、この時期の自分の姿がわかるものを記入し、学期末の振り返りのときに、自分の変容や成長がわかるようにしたい。

また、図4-5に示したものは、5・6年生用の振り返りシートである。これは、各学期の中間やまとめの時期に活用する。

この振り返りシートは、“5領域17の力”が高まったかということ子ども自身が振り返り、三段階で自己評価するものである。この自己評価を受け、思ったことや考えたこと、これから頑張りたいことも文章で記述する。

定期的に自己評価を行うことにより、子ども自身が気づいた、一定期間における変容や成長を見取ることができる。また、学期初めの目標を設定する際、ここで記述した振り返りを生かすことができると考える。

さらに、学年末の3月には、振り返りシートを基に子どもと保護者や指導者とが対話をする機会を設け、最後に、保護者と指導者が賞賛や応援メッセージ、アドバイスの言葉を記入する。他者からプラスの評価をしてもらうことにより、子どもの

**【キャリアノート 5・6年生用】 ～ふり返ってみよう!～**

年 組 ( )

できたかな? 自分のことをふり返ってみましょう。 ◎…よくできた ○…まあまあできた △…あまりできなかった

5領域 と 17の力		前期	後期	振り返り
		中間(7月)	まとめ(10月)	中間(12月)  まとめ(3月)
生 活 共 同 性	① 自分とちがった考えを理解する。 人のやさしさや思いやりがわかる。			前期: 中間(7月)
	② 相手の立場に立って考え、行動する。 様々な人との活動に進んで参加し、役割と責任をはたす。			
社 会 性	③ いろいろな国の文化に親しむ。 いろいろな国の言葉を話してみる。			前期: まとめ(10月)
	④ 地域の活動に参加し、楽しむ。 地域の産業や伝統を知り、関心をもつ。			
判 断 力	⑤ クラスや学校、地域社会のために自分ができることを考え、行動する。			後期: 中間(12月)
	⑥ 家族のために進んで役に立とうとする。			
活 用 力	⑦ 自分のことは自分で決め、行動にうつす。 ルールやマナーを考えて行動する。			後期: まとめ(3月)
	⑧ 自分なりに納得できる選択をする。			
つ づ きの 力	⑨ 自分に合った課題を見つけ、解決に向けて進んで取り組む。 夢や希望をもち、実現をめざして努力する。			
	⑩ インタビューをしたりコンピュータを活用したりして、必要な情報を集める。 ⑪ 職場見学などを通して、働くことの大切さや苦労がわかる。 働くことの意義や社会奉仕することの大切さがわかる。			
学 習 力	⑫ コンピュータなどを活用して情報を選択したり、みんなに伝えたりする。			
	⑬ 進んで役割を受けもち、責任を果たそうとする。			
学 習 力	⑭ 先を見通し、行動する。			
	⑮ 自分の特徴(長所・短所)がわかる。 ⑯ 将来のことを考える大切さがわかる。 ⑰ 働くことや学ぶことの意味がわかる。			
学 習 力	⑱ 高い目標をもち、実現できるよう努力する。			
	⑲			

<お家の方から>

<先生から>

図4-5 振り返りシート (5・6年生用)

自己肯定感や、自己実現に向けて前向きに努力しようという意欲を高めることができると考える。

一方、教科等の学習で活用したワークシートや学校行事の振り返りで書いた感想文は、その時間や場面において子どもが感じたことや考えたことを見取る資料となる。これらをキャリアノートに蓄積していくことにより、能力が高まっていく様子や考えの変容といった成長を、子ども自身も指導者も見取ることができる。

以上のことから、「働くことや生きることを通して、自らの在り方や生き方を考える」という目的をもつキャリアノートの中には、次のようなものを綴るとよいと考える。

#### 《キャリアノートの要素》

- \* 子どもの成果物  
(学習歴：ワークシート、情報メモ、...)  
(作品・活動歴：作品の写真、資格や受賞の記録、学校内外における奉仕活動、...)  
(心身の成長歴：身体計測の記録、...)
- \* 子ども自身による、自己評価  
(成果と課題、満足の種類、思いや考え、...)
- \* 友だち、保護者や地域の方、指導者などによる、他者評価  
(賞賛や応援メッセージ、アドバイス、...)
- \* 体験的な学習などにおける、キャリア発達にかかわる逸話
- \* 子どもとの対話の記録 など  
(注意) 個人情報の扱いに、十分配慮する。

収集したものは、学習や学期の節目に読み返し、自分自身で整理するという機会を設定することが大切である。自分自身で並べ替えたり、必要なものか必要でないものかを取捨選択したりすることにより、自分の良さや課題を見つけ、次の目標設定に生かしたり、自己理解をさらに深めたりすることができると思われるからである。

また、評価活動において、指導者による観察だけでなく、このようなキャリアノートを活用することは、子どもの自己理解能力や将来設計能力をはぐくみ、キャリア発達を詳細に見取る上で有意義なことである。そこで、キャリア発達の履歴となるキャリアノートを、学年や校種の枠を超えてつないでいくことも必要になってくる。キャリアノートを次の学年で活用することにより、連続的に諸能力をはぐくみ、子どもの成長を見取ることができるからである。

以上のことから、子どものキャリア発達の履歴であるキャリアノートを活用する際、大切にした

いポイントをまとめると、次のようになる。

#### 《キャリアノート活用のポイント》

- \* 初めは、中身を時系列で並べ、時間の経過が意識できるようにする。(タイトルやテーマと日時を必ず記入しておく。)
- \* 子どもの言動や意識の変容・成長がわかるように工夫する。
- \* 収集したものを子ども自身が読み返し、再編集する機会を設ける。
- \* 学年や校種の枠を超えて次年度に持ち上がり、次時の学習や将来の生活、生き方を考える際に生かす。
- \* キャリアノートは学校保管とする。また、適宜、家庭に持ち帰り、学習内容やキャリア発達の状況を保護者と話し合う場を設定する。

ただし、子どものキャリア発達の状況を的確に把握するためには、キャリアノートに綴られた、子どもの成果物だけに頼るのではなく、相談活動による言葉かけや対話などを通して、多面的に見取ることが大切である。また、それに加え、教職員が情報交換を行い、子どもの変容や成長を様々な角度から見取することも大切である。子どもの変容や成長は、日常生活のあらゆる場面で表れるものである。多くの情報を基にキャリア発達を見取り、支援することが求められる。

このように、キャリア発達の状況を記したキャリアノートを作成し、活用することは、子どもがよりよい自己実現をめざし、生き方探究教育を充実させることにつながると考える。

(37)前掲(10) p.52

(38)前掲(10) pp.53~56

## おわりに

夢には、「やる気」や「元気」を引き出す力がある。夢は、未来だけでなく、「今日」という現在を希望に満ちたものにしてくれる。この“夢の種”を育てる生き方探究教育は、授業改善の視点となり、学習意欲を高め、学力保障にもつながった。生き方探究教育のさらなる充実が、子どもたち一人一人の未来に向かって伸びる樹を、大きく成長させてくれるものと信じている。

最後に、本研究の趣旨を理解し、熱心に実践授業に取り組んでいただいた京都市立仁和小学校、京都市立六条院小学校の研究協力員の先生方をはじめ、教職員や地域の皆様方に、心より感謝の意を表したい。